



Title	北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2015 : 年次記録 : 札幌サステナビリティ宣言2008を再確認する
Issue Date	2017-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65301
Type	report
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	chapter-2.pdf ()



[Instructions for use](#)

2. 開催行事のウェブサイト



行事内容

開催日時	2015年8月21日(金)・28日(金)、9月4日(金)・11日(金)・18日(金)・25日(金) (終了しました)
主催者	大学院工学研究院
会場	北海道大学工学部 B11講義室(B棟1階)
言語:日本語(通訳無し)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>自然界にある物質は、見方によってはとても不思議な性質を持っています。ミリよりも小さいミクロの世界、さらに小さいメゾの世界、もっと小さくナノの世界が自然界物質の多様性を作り、工学的な価値を生み出します。また、不思議な自然の性質により、魔法をかけると水をはじくガラスや、電気を流す有機物などができあがります。</p> <p>これらの性質を人びとの生活にうまく取り入れたいと、北海道大学工学部は日々研究に励んでいます。今回の講座では、その最前線の様子を研究者がわかりやすく解説し、カラフルな画像や動画・イラストで伝えます。</p>
北海道大学側の実施責任者	北海道大学工学系事務部教務課 教務課長 岡林 精二
事前申し込み	有り(開催期間中の申し込みも可能です。)
参加費	1回 1500円、6回 3500円(事前振込要)
問い合わせ先	<p>※申し込みを希望される方は、お電話にてお申し込み頂くか、北海道大学大学院 工学研究院公開講座ウェブサイトより所定の「受講申込書」を入手頂き、下記までお送りくださいますようお願いいたします。(持参・郵送・FAX・Eメールいずれも可) 詳しくは下記ウェブサイトをご確認ください。</p> <p>北海道大学工学系事務部教務課</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ E-mail: k-gaksei[at]eng.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください) ・ TEL : 011-706-6707 ・ 北海道大学大学院 工学研究院公開講座ウェブサイト: http://goo.gl/v7lqk1
URL	http://www.eng.hokudai.ac.jp/graduate/top/news/?topic=15042201

実施報告

一般市民、高校生、大学生、専門家を対象として、公開講座「神秘的な物質－その科学と応用－」を、8月21日から9月25日の毎週金曜日18:15～19:45にて、計6回にわたり開講しました。

工学研究院では毎年2つの公開講座を開講しており、4月から7月に開講された「廃棄物学特別講義－循環型社会を創る－」に続き、応用理工系学科が主体となり本公開講座を実施しました。

参加者は、一般市民の方が60名受講し、他大学の学生や社会人の方も多数参加しました。熱心に受講され、講義終了後も質疑応答が活発に交わされました。

自然界にある物質の様々な性質を生活にうまく適用したいと、「生物に学んで新しいガラスを創る」や「細胞の中のプラスチック工場」と題し、日々研究に励む6名の講師がその最前線の研究をカラフルな画像や動画・イラストを用い、わかりやすく市民に説明しました。

工学研究院は、自然界に存在する不思議な物質を利用し、また新しく活用して、市民とアイデアを出し合っ
てこれからも持続可能な社会の構築に貢献したいと考えています。



忠永 清治 教授による講座の様子



大野 宗一 准教授による講座の様子

シンポジウム ボルネオの持続可能な土地管理と生物多様性



行事内容

開催日時	2015年9月28日(月) (終了しました)
主催者	サステナビリティ学教育研究センター、JICA SDBEC
共催	農学研究院、大学院環境科学院
会場	農学部講堂

言語: 英語(通訳無し) 対象: 専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要

北海道大学とマレーシアのサバ州(ボルネオ島)にあるサバ大学(University Malaysia Sabah, UMS)は大学間協定を締結しており、ボルネオ島は生物多様性のホットスポットとして知られています。UMSにある熱帯生物保全研究所(ITBC)はJICAのボルネオにおける生物多様性との研究拠点でもあります。このITBCのCharles所長(北大で学位)を迎え、ボルネオの生物多様性保全に関して講演して頂きます。

また、サバ州農業局よりサバ州としての生物多様性に関する取り組み、酪農学園大学からはサバで行なっている草の根活動について、JICAからサバでおこなっている持続可能性に関する活動、北大はこのJICAの活動を支援しているが、この活動に関して、それぞれ講演を行います。

* ポスター *

(※画像をクリックすると、詳細をご覧になれます。)



北海道大学側の実施責任者	サステナビリティ学教育研究センター 准教授 辻 宣行
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	サステナビリティ学教育研究センター 辻 宣行 TEL: 011-706-3569 E-mail: n-tsuji[at]census.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)
URL	http://www.census.hokudai.ac.jp/

実施報告

マレーシアにある国立サバ大学は、本学と提携している大学の一つであり、また大学が位置するボルネオ島は、生物多様性のホットスポットとして世界的に知られています。サバ大学の熱帯生物保全研究所はボルネオに於ける生物保全研究の中心です。

今年、サバ大学・熱帯生物保全研究所のチャールズ・バイラツパン(Charles S. Vairappan) 所長をお招きしました。また、サバ州農林局のエリザベス・マランキグ(Elizabeth Malangig)氏もお招きし、ボルネオを表す代表的なキーワード、「Heart of Borneo (HoB/ハート・オブ・ボルネオ)」についてご講演をお願いしました。更に、JICAの依田 明美 氏(北大卒)に、JICAがコタキナバルで展開している生物多様性保全に関するプロジェクト(SDBEC)を紹介して頂きました。また、同じくサバ州で草の根プロジェクトを展開している酪農学園大学の金子 正美 先生にもご講演頂きました。最後に、北海道大学 農学研究院 大崎 満 先生により、ボルネオになぜ注目したかについて、参加者と議論しながらまとめが行われました。

このシンポジウムは、本学サステナビリティ学教育研究センター、JICA・SDBECプロジェクトの主催、本学農学研究院、環境科学院の共催で開催されました。これを開催できたのは、主催者、共催者とサバ大学とのこれまで構築してきた深いネットワークによります。今回来学されたチャールズ所長は北大で学位をとられており、昨年は、同大学の学長、エコキャンパスオフィス代表等も来学されました。発表は全て英語で行い、参加者総数は30名程、内学外者は10名程でした。



Elizabeth Malangig氏による講演の様子



講演の様子_2



行事内容

開催日時 2015年10月11日(日) (終了しました)

主催者 TEDxHokkaidoU

会場 北海道大学 フード&メディカル イノベーション推進本部

言語: 日本語・英語(逐次通訳あり) 対象: 一般市民・大学生・院生・高校生

行事概要 米国で人気のプレゼンテーション行事「TED(テッド)」を、TEDxHokkaidoUとして、北大生が企画・運営を行い開催します。「TEDx」は、価値あるアイデアを広めるというTEDの精神を受け継ぎ、ローカルな地域や大学でイベントを行うプログラムです。

TED^x HokkaidoU
 x = independently organized TED event

「北海道大学には、まだ知られていない価値あるアイデアがたくさんあるはず…！」過去に色々な分野の人々がプレゼンテーションを行ってきたTEDxイベントですが、北海道大学で開催することにより、学部や世代を超えたワクワクする場をつくりたいと思いました。

TEDxHokkaidoU 2015のテーマは、『Allure of Adventure 冒険の誘惑』です。

ここで言う「冒険」とは、恐れることなく自分の好奇心に素直になり挑戦すること。「誘惑」とは、若者たちの周りに無数に存在する選択肢の内、彼ら自らが能動的に掴み取りたいような選択肢のこと。

これから新たな挑戦に踏み出す人、そして今もなお挑戦し続ける人へのエールを込めました。そこで出会う一人一人の冒険がきっかけとなり、自分の可能性を信じた選択を後押しするような場を創ります。

イベント詳細はTEDxHokkaidoUウェブページもしくはFacebookページからをご覧ください。

* TEDxHokkaidoU ウェブサイト :

<http://www.tedxhokkaidou.com/>

* TEDxHokkaidoU Facebook :

<https://www.facebook.com/pages/TEDxHokkaidoU/1554822688134561>

北海道大学側の実施責任者	北海道大学工学部3年 重井 真琴
事前申し込み	有り(参加希望者はTEDウェブサイトにて申込必須)
参加費	有料(詳細はTEDxHokkaidoUウェブサイトにて)
問い合わせ先	TEDxHokkaidoU実行委員会 E-mail: info[at]tedxhokkaidou.com(※[at]を@に変えて送信ください)
URL	http://www.tedxhokkaidou.com/

実施報告

TEDxHokkaidoUでは、講演を行うスピーカーとして、以下の7名に登壇していただきました。

- ・ロバート・トムソンさん(北海道大学文学研究科/スケートボード単独旅行ギネス記録保持者)
- ・エリザベス・タスカーさん(北海道大学理学部宇宙物理学研究室助教)
- ・松田光希さん(北海道大学理学部卒業生/日本パルクール協会会長)
- ・松代弘之さん(北海道大学工学部卒業生/一般社団法人日本スポーツ雪かき連盟代表理事)
- ・久保まりなさん(北海道大学法学部4年)
- ・山田智久さん(北海道大学国際本部留学生センター准教授)
- ・鈴木章さん(北海道大学名誉教授/2010年ノーベル化学賞受賞者)

それぞれ約18分のプレゼンテーションを行っていただいた後、休憩時間や懇親会を通じて参加者がスピーカーと交流できる機会を設けました。特に休憩時間では、TEDトークに基づくアクティビティなどを行い、参加者同士の交流も楽しんでいただきました。

トーク動画は、YouTube上で公開しています。今後も、北海道大学から知的好奇心を刺激するアイデアを発信することで、TEDxHokkaidoUは学生や社会にポジティブな影響を与えていきたいと思いをします。

* 当日の講演動画はこちらからご覧になれます : <https://goo.gl/rN7Nhy>

(※講演者7名のうち、6名分のみ公開中です。)



講演の様子



学生主体のアクティビティの様子



講演者と参加者の集合写真



触媒科学研究所 国際シンポジウム

行事内容

開催日時	2015年10月13日(火)14:00～19:00・14日(水)9:00～19:00・15日(木)9:00～17:00 (終了しました)
主催者	北海道大学 触媒科学研究所
共催	触媒学会、日本化学会北海道支部、北海道大学フロンティア化学教育研究センター
会場	フロンティア応用科学研究棟
言語:英語(通訳無し)	対象:専門家・大学生・院生
行事概要	<p>2015年10月より、北海道大学の「触媒化学研究センター」が「触媒科学研究所」へと改組されます。その改組を記念して、10月13日には記念講演会、式典、祝賀会を開催します。引き続き、10月14日～15日には、国内・海外から第一線で活躍する著名な研究者を招へいし、国際共同研究の促進、サステナブル社会へ向けての革新的触媒開発に向けた、意見交換を目標とした国際シンポジウムを開催します。</p> <p>～開催時間詳細はこちら～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10/13(火) 14:00 - 19:00 記念講演会、式典、祝賀会 ・10/14(水) 9:00 - 19:00 国際シンポジウム ・10/15(木) 9:00 - 17:00 国際シンポジウム <p>* ポスター *</p> <p>(※クリックすると詳細がご覧になれます。)</p>

* プログラム(英語) *

(※クリックすると詳細がご覧になれます。)



北海道大学側の実施責任者	触媒科学研究所 朝倉清高
事前申し込み	有り(E-mailにて8/31まで受付。8/31以降は問合せ要)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 触媒化学研究センター 中山 哲 E-mail: nakayama[at]cat.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください) TEL: 011-706-9145
URL	http://www.cat.hokudai.ac.jp/symposium/symposium2015-10-13.html

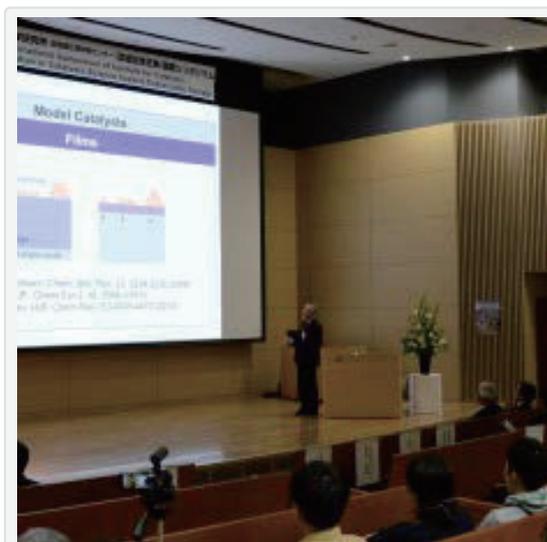
実施報告

平成27年10月、北海道大学触媒化学研究センターは、他分野との国際的共同利用・研究を目的に、「触媒科学研究所 (Institute for Catalysis)」に改組されました。その改組を記念して国内・海外から第一線で活躍する著名な研究者を招聘し、国際シンポジウム (First International Symposium of Institute for Catalysis – Global Collaboration in Catalysis Science toward Sustainable Society) を開催しました。

初日の10月13日には、ドイツ・フリッツ=ハーバー研究所のHans-Joachim Freund教授、京都大学の諸熊奎治教授、東京大学の堂免一成教授より基調講演があり、10月14日と10月15日には、海外(米国3名、中国4名)と国内(10名)の研究者による招待講演、また触媒科学研究所の研究者(10名)による一般講演がありました。

また、10月14日にはポスターセッションも行われ、41件の発表がありました。サステナブル社会に向けての革新的触媒開発に関する意見交換が活発になされ、新たな国際的共同研究への発展も期待されました。

また、本シンポジウムは、総合化学院の授業である「総合化学特別研究第二」と「化学研究先端講義」の一環としても開催され、多くの大学院生が聴講に来ていました。



基調講演の様子



ポスターセッション会場の様子

北方圏のまちづくり・エネルギー・木造建築に関する国際シンポジウム



行事内容

開催日時	2015年10月15日(木) (終了しました)
主催者	大学院工学研究院 建築環境学研究室・建築史意匠学研究室
共催	アアルト大学(フィンランド)
後援	日本建築学会北海道支部, 空気調和衛生工学会北海道支部, 北海道フィンランド協会
会場	遠友学舎
言語	日本語・英語(同時通訳あり)
対象	専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	北緯40度以北、厳寒の北方圏は、その厳しい寒さゆえに地域を維持するために多くのコストやエネルギーがかかり、自治体は人口減少問題に直面しています。一方で、この地域には美しい自然があり、木材などの天然資源にもとづいた豊かなライフスタイルがあります。本シンポジウムでは、北海道とフィンランドの多様な知見をもった専門家が、北方圏の地域開発について、木造建築・エネルギー・まちづくりの視点から、今後の社会情勢をふまえて北方圏がどのように持続していくことができるかを議論をします。
北海道大学側の実施責任者	大学院工学研究院 建築環境学研究室 准教授 森 太郎
事前申し込み	必要(※2015年10月10日をもって申込受付を終了しました)
参加費	無料
問い合わせ先	大学院工学研究院 建築環境学研究室 森 太郎 E-mail: mori.taro[at]eng.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

本シンポジウムは、北海道大学の協定校であるフィンランドのアアルト大学とフィンランドの技術系の研究機関であるVTTから4人の研究者を招きました。また、基調講演を藤女子大学の三宅理一先生にお願いし、北方圏のまちづくり、エネルギー、木造建築に関する話題提供と情報交換を行いました。

本シンポジウムの端緒となったのは、2014年3月の北海道大学とアアルト大学の交流行事です。その後、11月にラップランド大学のワークショップ、2015年6月にKINNO（フィンランド、コウボラ市）においてSustainable Regional Developmentというセミナーを実施し、情報交換を行いました。

三回の研究交流はいずれもフィンランドで実施し、フィンランドと北海道の共通する課題やそのソリューションに影響を与える文化的な違いについて議論を行ってきましたが、やはり北海道の実態をみて頂いたうえで議論を発展させていくことが必要であろうということになり、今回のシンポジウムを開催する運びとなりました。

北海道とフィンランドは寒冷な気候や人口規模が似ており、また、先進国であるため、高齢化やそれに伴う人口減少等の社会問題も同様におきています。したがって、それらをソフトランディングさせるための方策を探っているという点で研究的な課題を共有することができます。また、森林資源が豊富であるという点では同じですが、森林資源の効率的な利用という点では、フィンランドの方に一日の長があり、私たちは多くの知見を学ぶことができます。

エネルギーに関しては、同じ北方圏であることから太陽電池の発電量のピークと電力のピークがずれるため、太陽電池に頼らない再生可能エネルギーの開発や省エネルギーを通してZEB（ゼロエネルギービルディング）、ZEH（ゼロエネルギーハウス）を達成していく必要があります。共通の課題となっています。

今回のシンポジウムでは、これらすべての課題を包括的に扱いました。シンポジウム終了後には、道北地域の視察も行い、VTT、アアルト大学と今後も継続して意見交換していくことを確認しました。



三宅先生による基調講演の様子



会場の様子

学術成果のオープンアクセスとHUSCAP《展示》



行事内容

開催日時	2015年10月19日(月)～2015年11月2日(月) (終了しました)
主催者	北海道大学附属図書館
会場	附属図書館本館 玄関ホール
言語:日本語	対象:一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>HUSCAP(ハスカップ=北海道大学学術成果コレクション)では、北海道大学のさまざまな学術成果を電子ファイルで恒久的に保存し、広く世界で共有するためにWEB上で無料公開しています。</p> <p>「持続可能な社会」を実現するためには、学術成果を広く世界に発信することが必要です。</p> <p>今回の展示では、誰もが学術成果を利用できるようにしようという『オープンアクセス運動』や、研究段階のデータも公開しようという『オープンサイエンス運動』についてご案内します。</p> <p>また、現在HUSCAPで取り組んでいる様々な研究や、実際にHUSCAPを利用している北海道大学の研究者の声などもご紹介します。</p>
北海道大学側の実施責任者	附属図書館学術システム課 学術システム課長 岸本 一志
事前申し込み	なし
参加費	無料
問い合わせ先	<p>附属図書館学術システム課</p> <p>E-mail: huscap[at]lib.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)</p>
URL	http://eprints.lib.hokudai.ac.jp

実施報告

持続可能な社会の実現へ向けて、学術成果を世界の人々と共有することが出来るオープンアクセスと、北海道大学学術成果コレクション(HUSCAP)についてのポスター展示を開催しました。

展示では、「オープンアクセスからオープンサイエンスへ」をテーマに、オープンアクセスの現状と、HUSCAPでの取り組み、オープンサイエンスの意義や展望について説明しました。さらに、現在HUSCAPで公開されている北大の学術成果とその意義について、本学教員にインタビューさせて頂き内容を公開しました。HUSCAPで公開されている多様な学術成果と教育研究成果を、誰もが読むことが出来るオープンアクセスの現状や、論文だけではなく研究データも一緒にオープン化するオープンサイエンスの意義や展望について広く周知することが出来ました。

附属図書館では、今後も北海道大学のオープンアクセスやオープンサイエンスを実現するためにHUSCAPについての理解を深める取り組みを進めていきます。



展示したオリジナルブックカバーやしおり



展示の様子

ワークショップ 国際交流のスキル

—教養・学部・修士学生のための国際コミュニケーション—



行事内容

開催日時	2015年10月20日(火)～2015年10月21日(水) (終了しました)
主催者	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
会場	国際本部 2階 中講義室(217)
言語	英語(逐次通訳あり) 対象:大学生・院生
行事概要	<p>近年、大学生・院生の留学や国際会議への参加が多くなっています。研究内容や関心事項を相手に伝える、また相手の関心事項を正確に理解することが重要です。</p> <p>このワークショップは、コミュニケーション(話し方や聴き方)を実践形式で理解することを目標に、開講します。講師は多数の国際プロジェクトを手掛ける女性研究者、Silvana NICOLA先生(北大特任教授)をお招きします。先生はイタリア出身、アメリカで学位取得、現在トリノ大学教授、国際園芸学会副会長で、5ヶ国語を話します。NICOLA先生の経験を参考にしたワークショップです。</p>

北海道大学側の実施責任者	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 教授 荒木 肇
事前申し込み	必要(※2015年10月16日をもって申込受付を終了しました)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 荒木 肇 TEL、FAX: 011-706-3645 E-mail: araki[at]fsc.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

平成27年度の北海道大学外国人招聘教授、Silvana NICOLA(シルバーナ ニコラ)先生(イタリアトリノ大学)は現在国際園芸学会の副会長で、多数の国際教育や共同研究プロジェクトを手がけています。ニコラ先生の経験をもとにして、学部学生や大学院生向けに、国際交流のスキル、特にコミュニケーションに関するワークショップを開催しました。自己紹介では、受講生からは「外国語の基本は英語である」「英語でのコミュニケーション能力をつけたい」「将来は海外で仕事をしたい」等の受講動機が出されました。

ニコラ先生は17歳で初めて外国に行ったこと、28歳で国際会議での初めての報告をしたこと、本格的な英語の勉強は30歳を超えてからだった事などを紹介されました。その後、4つの問いかけをして受講学生と意見交換をしました。問いかけは、①なぜ第2外国語を学ぶのか？ ②今後のキャリアにどのような海外体験が有効か？ ③どのような環境が必要か？ ④海外で種々の体験をする機会はあるか？ でした。受講生からは、①外国語は英語が基本 ②海外旅行の経験はあるが、それではコミュニケーションがとれるようにはならない。目的をもった海外体験が必要 ③リスニングを鍛えたい ④大学間や研究室交流等を活用して国際経験をつみたい 等の回答がありました。

ニコラ先生から、①できる限り英語を使う機会を多くすること(例えば北大に來ている留学生との気軽なセミナー等)、②海外に行くチャンスがあれば積極的に活用すること、③海外で体験をするための支援サイトがあることなどの説明がありました。最後にネルソン・マンデラ氏の言葉を引用し、「文字を使うと頭で理解できる そして相手の言葉を使うと心が通じる」ことを解説してワークショップを終了しました。



ニコラ先生の講演の様子



ワークショップの様子



行事内容

開催日時	2015年10月22日(木) (終了しました)
主催者	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
会場	国際本部 2階 中講義室(217)
言語: 英語(通訳無し)	対象: 大学生・院生

行事概要

博士大学院生を含む研究者が、国際的な研究活動を行うのに必要なスキルである英語力と国際交流技術について、多数の国際プロジェクトを手掛ける女性研究者、Silvana NICOLA先生(北大特任教授)が体験を通して解説します。英語力については、論文執筆能力以外にネットワーク構成・プロジェクト設立・チームワーク上の役割を具体例で説明し、国際交流技術ではリスニング・マナー等を説明します。参加者からの質問にも答える形で進行します。NICOLA先生はイタリア出身、アメリカで学位を取得し、現在トリノ大学教授、国際園芸学会副会長で、5ヶ国語を話します。

北海道大学サステナビリティ・ウィーク
ワークショップ
国際交流のスキル
すべての学生と研究者のための
国際コミュニケーション
2015.10.20~22

近年、留学や国際会議への参加が多くなり、自身の研究内容や関心事項を相手に伝え、また相手の関心事項を理解することが求められています。その時のコミュニケーションスキルを、講師NICOLA先生の経験を参考に、実践形式で習得することを目標にしたワークショップです。

◎対象・学修・博士学生対象
○10/20(水)、10/21(木) 17:00-19:00
コミュニケーションスキル(話し方や聞き方)を学びます。

◎博士学生・研究者対象
○10/22(木) 15:00-17:00
実践力と国際交流技術について解説します。
[ネットワーク・プロジェクト設立・チームワーク上での英語の活用やリスニング・マナー等]

◎会場: 国際本部2階 中講義室217
◎講義人数: 毎回20名
◎申込方法: サステナビリティ・ウィーク ウェブサイトで受付
URL: <http://sustainability.hokudai.ac.jp/ww/>
北大1号からは「国際交流・留学」→「北海道大学サステナビリティ・ウィーク」→「2015年の行事一覧」→「国際交流のスキル」
◎申込期限: 10/19(日)
◎主催: 北方生物圏フィールド科学センター
◎問合せ先: 教員・荒木 肇
(内線 2646 メール arakih@hokudai.ac.jp)

◎講師:
Silvana NICOLA先生
(北大特任教授)
イタリア出身、アメリカで学位取得、現在トリノ大学教授、国際園芸学会副会長。多数の国際プロジェクトを主導する女性研究者で、3ヶ国語を話せることから国際交流の達人と称される。

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク2015
FESTA
北海道大学2015

北海道大学側の実施責任者	北方生物圏フィールド科学センター 教授 荒木 肇
事前申し込み	必要(※2015年10月16日をもって申込受付を終了しました)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 荒木 肇 TEL、FAX: 011-706-3645 E-mail: araki@fsc.hokudai.ac.jp

実施報告

平成27年度の北海道大学外国人招聘教授のSilvana NICOLA(シルバーナ・ニコラ)先生(イタリアトリノ大学)は現在国際園芸学会の副会長で、多数の国際教育や共同研究プロジェクトを手がけています。ニコラ先生の経験をもとにして、若手研究者向けに学部学生や大学院生向けに、英語による国際交流のスキルに関するワークショップを開催しました。

受講者の多くはポスドク研究者で、今後の海外活動の一助にしたいとの希望が述べられました。ニコラ先生は学生向けワークショップと同様に自己紹介された後に、英語での国際交流の意義として、英語は研究発表の手法であり、多くの自然科学論文は英語で執筆され、英語で報告されるが、この場合、技術普及書は自国の言語が使用されることと対立的に考えることを避けたいとの指摘がなされました。

英語は知識の伝達の道具であり、学生指導、講義やセミナーが開催されると指摘されました。特にヨーロッパでは多数の外国人学生(自国民ではない)が研究室に多く在籍しており、ニコラ先生の研究室では実験マニュアル書はすべて英語にしたと説明していました。英語は相互理解の道具であり、外国人学生やスタッフとの交流、プロジェクト研究の相談や企画等が英語によってなされるの3点が指摘されました。

さらに研究者の国際交流では以下の10項目も重要であるとの経験を説明されました。(10項目:「寛容性」「適応性」「個人の自律性」「精神力」「理解力」「積極的に聞くこと」「論旨の明瞭性」「異国文化の理解」「交友関係」「相手との協働」)

受講した研究者との交流では「自身の研究室では海外研究者との交流が少なく、できればバックグラウンドの異なる研究者との交流を希望する」「ニコラさんのような方と日常的に話しでき、海外との共同研究にモチベーションを高めたい」の意見が出されました。このワークショップを通じて、参加したポスドク研究者は専門分野以外の研究者や教員との交流を求めており、外国人招聘教員が自身の大学のことを話題にしてポスドク研究者と交流する取組は有益と考えました。



ワークショップの様子



ワークショップの様子_2

女性研究者の持続的な活躍を目指して ～研究人材の多様化と研究者支援のありかた～



行事内容

開催日時	2015年10月27日(火) (終了しました)
主催者	北海道大学 人材育成本部 女性研究者支援室
会場	学術交流会館(小講堂、第二会議室)
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>北海道内の大学、公的研究機関、民間研究機関の研究者が集まって議論し、女性研究者の支援策について、共通する部分・異なる部分を再確認し、限られたリソースの中で有効で持続的な研究者支援を行うための方策を考えます。</p> <p>* ポスター *</p> <p>(※画像をクリックすると詳細をご覧になれます。)</p>



北海道大学側の実施責任者	人材育成本部女性研究者支援室 特任准教授 長堀 紀子
事前申し込み	無し(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 人材育成本部女性研究者支援室 TEL: 011-706-3625 E-mail: freshu[at]synfoster.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

10月27日(火)に学術交流会館小ホールにて、女性研究者支援室主催のシンポジウム『女性研究者の持続的な活躍を目指して～研究人材の多様化と研究者支援のありかた～』を開催しました。

本シンポジウムは、平成25年度より実施中の文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業(拠点型)」を総括するものであると同時に、北海道大学サステナビリティ・ウィークの一環として開催しました。

一つ目の基調講演では、科学技術振興機構プログラムオフィサーを務める山村 康子氏より「女性研究者を取り巻く環境と政策等について」をお話いただきました。女性研究者を取り巻く環境の国際比較、各種調査データや国内大学における取り組みのベストプラクティスの紹介、ならびに今後の政策の方向性等が示されました。

二つ目の基調講演では、名古屋大学教授・副理事・男女共同参画推進センター長の東村博子氏より「女性の活躍で大学を活性化～名古屋大学の取り組みを中心に～」と題してお話いただきました。女性研究者活躍推進を大学の戦略として位置付けトップダウンで取り組むことの重要性ならびに大学の価値向上へもたらすインパクトについて、名古屋大学の事例として示されました。

パネルディスカッションでは基調講演のお二方に加え、金沢大学より池本良子教授、室蘭工業大学より貞許礼子特任教授、本学の望月恒子副学長を交えて、3大学の具体的な取り組み紹介に続き、大学以外の機関との連携における効果や課題について話合われた他、今後の研究者支援の方向性や政策的意義等について幅広く議論しました。

シンポジウムには学内外から40名強の参加者が集まり、質疑応答等の活発な議論が行われました。今後も女性研究者支援室では、多様なバックグラウンドをもつ研究者が活躍し定着できる研究環境の構築や、ダイバーシティ推進に向けた意識改革を進めてまいります。



パネルディスカッション事例紹介の様子



質疑応答の様子



行事内容

開催日時 2015年10月29日(木)13:00~18:00・10月30日(金)9:00~13:00 (終了しました)

主催者 セラミド研究会

共催 さっぽろヘルスイノベーション “Smart-H”

会場 学術交流会館(小講堂)

言語: 日本語・英語(通訳無し) **対象:** 専門家・一般市民・大学生・院生

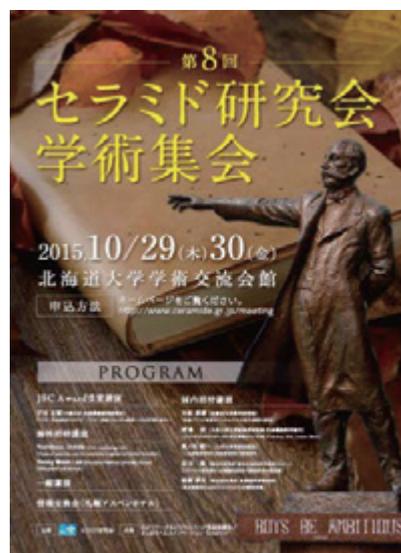
行事概要

機能性食品や化粧品の素材などで近頃よく聞く「セラミド」。私達の体の健康維持には、細胞の脂質成分であるセラミドが、癌、神経、皮膚などの組織で重要な働きをしていることがわかってきました。例えばセラミドや糖セラミドは皮膚組織や神経系組織の機能に深く関わっています。また、がん細胞の抑制機能、糖尿病の発症との関連など色々な疾患との関連も指摘されてきています。

本研究会では、大学の研究者や企業の研究者による講演、ポスター発表を中心に、セラミドに関する研究のさらなる進展のため、交流をはかります。また、平成24年よりスタートした、北海道の強みである「食」を中心にして健康・医療の技術や知識を活かす取組み「さっぽろヘルスイノベーション(Smart-H)」事業の展開をする一助とします。

* ポスター *

(※画像をクリックすると詳細がご覧になれます。)



プログラム

(※画像をクリックすると詳細がご覧になれます。)



*** セラミド研究会ホームページはこちら ***

<http://www.ceramide.gr.jp/meeting/index.html>

北海道大学側の実施責任者	大学院先端生命科学研究院 次世代ポストゲノム研究センター 特任教授 五十嵐 靖之
事前申し込み	要(セラミド研究会ホームページ内で詳細を案内)
参加費	有料(一般:8,000円 / 学生:無料)
問い合わせ先	セラミド研究会事務局 E-mail: info[at]ceramide.gr.jp (※[at]を@に変えて送信ください) HP: http://www.ceramide.gr.jp/
URL	http://www.ceramide.gr.jp/

実施報告

第8回セラミド研究会学術集会は10月29、30日の2日間、学術交流会館 小講堂で開催されました。参加者は全体で約140名のうち、全国の大学や企業研究所から100名、学内からは20名の学生を含む約40名が参加し、活発な討論が繰り広げられました。

今回の海外招待講演は、皮膚バリア機構研究の第一人者であるカリフォルニア大学サンフランシスコ校のYoshikazu Uchida博士、毛髪成長とスフィンゴ脂質に関する研究をしている韓国忠北大学のYoung Moon Lee教授、ランチョンセミナーはテネシー大学のGabor Tigyi教授が、S1P受容体の構造解析に関してそれぞれ講演されました。また、JSC受賞講演は中部大学の芋川玄爾先生が、セラミドと皮膚バリアの30年間の研究をまとめて話され、聴衆に感銘を与えました。

国内招待講演では、皮膚のアシルセラミドに関する酵素系の研究(北海道大学 木原章雄先生)、真菌エンドセラミダーゼに関する研究(九州大学 伊東信先生)、上皮-間充織変換での脂質の役割(九州大学 池ノ内順一先生)、ノンターゲットリポドミクスの開発の将来展望と現状(理科学研究所 有田 誠博士)、SM小腸吸収機構((株)明治 森藤雅史先生)などの5題、さらに一般演題17題の講演がなされました。

さらに、第6回JSC賞には本学薬学研究院の木原章雄先生、JSC若手賞には先端生命科学研究院の酒井祥太先生が選ばれました。

初日の夕方にはアスペンホテルで懇親会が開催され、50名以上が参加し、情報交換や共同研究の話し合いが積極的に行われました。次回開催は来年10月末、東京ユビキタス協創広場ということになりました。また、この会の講演や討論の詳細については、食品化学新聞のセラミド特集号(11月28日号)として広く一般に報道される予定です。



講演の様子



質疑応答の様子

脆弱な巨大炭素貯蔵庫－熱帯泥炭林－を監視する 温暖化緩和のために



行事内容

開催日時	2015年11月3日(祝・火)13:00～16:00 (終了しました)
主催者	大学院農学研究院
共催	環境省環境研究総合推進費(2-1504)、Wetlandセミナー
後援	JapanFlux、日本泥炭地学会
会場	学術交流会館(第一会議室)
言語:日本語(通訳無し)	対象:一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>東南アジアには広大な面積の熱帯泥炭林が広がり、膨大な量の炭素を土壌(泥炭)中に蓄積してきました。しかし、近年の森林伐採や農地開発などにより、泥炭の分解が進むとともに泥炭の火災が増加し、熱帯泥炭林から大量の二酸化炭素(温室効果気体)が排出される可能性が高くなってきました。地球温暖化を緩和するためには、「熱帯泥炭林」を保全することが非常に大切になっています。</p> <p>本セミナーでは、熱帯泥炭林の保全を目指して「監視」を行っている研究者が、最新の研究成果をもとに熱帯泥炭林の今と未来についてわかりやすく解説します。</p>

* 概要詳細はこちら *

北海道大学 サステナビリティ・ウィーク 2015

市民公開セミナー「豊饒な巨大炭素貯蔵庫－熱帯泥炭林－を監視する」

開催日時: 2015年11月3日(火・夜) 19:00～19:30
 会場: 北海道大学 理学次会館新館(工科大学の建物) 第一会議室
 対象: 大学生・社会一般(学生・高校生)
 主催: 大学院農学研究院
 共催: 環境情報研究組合棟造(19-1504)、Wardland セミナー
 後援: AeonPlus、日本農業大学協

発表タイトルと発表者

1. 熱帯泥炭林とは?(イントロダクションに代えて)
 (北海道大学 大学院農学研究院 教授 平野 高司)
2. 環境変化と変動した泥炭のダイナミックな変動
 (同上 講師 山田浩之)
3. 熱帯泥炭林から出てくる温室効果気体を探る
 (同上 博士研究員 沖元洋介)
4. 宇宙から熱帯泥炭林を監視する～人工衛星からの3月による観測～
 (宇宙航空研究開発機構-地球観測研究センター 研究員 本間智)
5. 熱帯泥炭の二酸化炭素貯蔵量の変化～気候変動と土地利用変化の影響～
 (国立環境研究所 地球環境研究センター 主任研究員 平田健一)

各発表の概要

1. 熱帯泥炭林とは?(イントロダクションに代えて)
 熱帯アジアには広大な面積の熱帯泥炭林が広がっており、最大量の炭素を土壌(泥炭)中に蓄積してきました。しかし、近年の森林伐採や農地開発などにより、泥炭の分層が薄くなり、泥炭の火災が増加し、熱帯泥炭林から大量の二酸化炭素(温室効果気体)が放出される可能性が高くなってきました。地球温暖化を緩和するためには、「熱帯泥炭林」を保全することが非常に大切になってきます。本セミナーでは、熱帯泥炭林の保全を目指して「監視」を行っている研究者が、最新の研究成果をもとに熱帯泥炭林の今と未来についてわかりやすく解説します。
2. 環境変化と変動した泥炭のダイナミックな変動
 泥炭地とは、数千年かけて枯死した植物が堆積してできた泥炭の広がる地帯を指します。その泥炭の堆積の速さは、年間で数センチメートルであると言われており、季節に依りてはありますが、その堆積量は環境によって徐々に上昇しています。また、その堆積量は季節的に上下に動き、徐も急激にしているように動いており、その現象はポンプの現象と呼ばれています。この季節的な動きには、雨や地下から湧き出る水の動き、乾燥率に生じる収縮

北海道大学側の実施責任者 大学院農学研究院 教授 平野 高司

事前申し込み 無し(直接会場へお申し込み下さい)

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学 大学院農学研究院

平野 高司、沖元洋介

E-mail: hirano[at]env.agr.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

E-mail: okimoto[at]env.agr.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

我々は、環境省による平成27年度の環境研究総合推進費によって研究プロジェクト「ボルネオの熱帯泥炭林における炭素動態の広域評価システムの開発」(課題番号:2-1504)を行っています。今回のイベントは、研究プロジェクトの成果を一般市民に向けてアウトリーチするイベントと位置付けました。共同研究を実施するプロジェクトメンバー(国立環境研究所、航空宇宙研究開発機構)を招いて、「市民セミナー 脆弱な巨大炭素貯蔵庫－熱帯泥炭林－を監視する」を開催しました。

発表者は合計5名であり、それぞれが担当する熱帯泥炭に関する研究課題について、質疑応答を含めて各30分間、これまでの研究成果や今後の研究課題について紹介しました。

参加者は全体で54名(日本人47名、留学生7名)、本学の学部生と大学院生、大学関係者、一般市民など、幅広い方々に参加して頂きました。イベント終了後に実施したアンケートでは34名の回答を頂き、「基本的・基礎的な説明からして頂けたので分かりやすく、問題点がはっきりして良かった。一般向けで分かりやすかった。」との回答が多くみられ、全体の94%の方が「非常に良かった、良かった」と評価する高い満足度が得られました。発表内容に関しても全体の94%の方が「とても易しい、易しい、適切」と回答し、研究成果や活動内容をわかりやすく参加者の皆様に説明できたと認識しています。

参加者の中には「今回のように、市民向けに研究の先端の現状を紹介する機会を多く企画して欲しい。」という声があり、共催・後援を頂いた機関・団体からも、このようなアウトリーチ活動を続けて欲しいとの要望を受けています。今後とも今回のような市民向けのアウトリーチの機会を積極的に活用し、研究の進捗状況や活動報告をわかりやすく広報するように務めていきます。



講演の様子



受付の様子

ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ



行事内容

開催日時	2015年11月3日(祝・火)13:00～16:00 (終了しました)
主催者	大学院保健科学研究院
会場	大学院保健科学研究院
言語:日本語(通訳無し)	対象:一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を分かりやすく行います。</p> <p>第1限目:</p> <p>「最後まで住み慣れた家で過ごすために」と題して、青柳講師が高齢者になっても、病気があっても自宅で暮らし続けられるよう、ケアについてお話しします。</p> <p>第2限目:</p> <p>「病原菌と戦う好中球の必殺技ー好中球細胞外トラップ」と題して、石津教授が好中球の細胞外トラップによる殺菌メカニズムと、その障害について解説します。</p> <p>第3限目:</p> <p>「超高齢化社会へ向けた車いすデザインの提案」と題して、八田教授と岸上助教が今よりもっと楽に座れて動きやすい車いす利用を提案します。</p>

* ポスター *

(※画像をクリックすると、詳細がご覧になれます。)



北海道大学側の実施責任者	大学院保健科学研究院 教授 浅賀 忠義
事前申し込み	有り(電話またはメールにて10月16日まで受付)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院保健科学研究院 医学系事務部保健科学研究院事務課 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu[at]hs.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、4名の講師が専門分野の紹介を行い、66名が参加しました。

第1限目は、青柳 道子 講師が「最後まで住み慣れた家で過ごすために」と題して、高齢者になっても病気があっても、自宅で暮らし続けられることを支えるケアについて講演しました。第2限目は、石津 明洋 教授が「病原菌と戦う好中球の必殺技ー好中球細胞外トラップ」と題して、病原菌と戦う好中球について、好中球の細胞外トラップによる殺菌メカニズムとその障害について解説しました。第3限目は、八田 達夫 教授と岸上 博俊 助教が「超高齢化社会へ向けた車いすデザインの提案」と題して、超高齢化社会への突入により車いす利用の増加に伴い、今よりもっと楽に座れて動きやすい車いすを提案しました。

講演者は、サステナビリティ・ウィーク2015のテーマである『札幌サステナビリティ宣言2008を再確認する』から、「大学は持続可能な社会実現のための原動力になること」をキーワードとして、保健科学の視点から講演しました。参加者からは概ね好評を博し、さまざまな質問があり、各講師はわかりやすく丁寧に解説を行いました。今後も毎年、その時の時代を反映するようなテーマや興味を持って参加いただけるようなテーマを設定して、同じ時期に公開講座を開催していく予定です。



伊達研究院長の挨拶の様子



八田講師による講演の様子

** 特別企画 ** 日本-インドネシア学長会議



行事内容

開催日時	2015年11月5日(木)、11月6日(金) (終了しました)
主催者	北海道大学
会場	学術交流会館、京王プラザホテル札幌
対象: 専門家	
行事概要	<p>インドネシアと日本の発展を牽引する研究型大学の代表者が、札幌サステナビリティ宣言が採択された地に集まり、持続可能な社会の実現に向けた協働の在り方について議論します。</p> <p>既に本学は、インドネシアの3大学と協働で大学院生向けの「PARE(ペアー)教育プログラム」を実施し、アジアの人口増加と環境劣化が絡み合う複合的な課題を解決する人材を、毎年30人ほど輩出しています。</p> <p>インドネシアの17大学、日本の26大学の代表者は、このような大学間の協働はもちろんのこと、産業界や地域自治体と大学とが連携する優良事例を学ぶとともに議論を通じて新たな可能性を探ります。</p> <p>※本行事は、招待者のみが参加できるクローズ会議です。議論の内容は後日、ウェブサイトで公開します。</p>

臭いものに蓋をしない? :「フン」をめぐる文化論や技術論

—アフリカやアジアの事例から—



行事内容

開催日時	2015年11月6日(金)13:30~17:30 (終了しました)
主催者	大学院工学研究院
共催	総合地球環境学研究所
会場	農学研究院大講堂
言語:日本語(通訳無し)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>し尿や家畜糞、廃棄物は、私たちのすぐ身の回りにあります。その扱いを誤れば衛生や環境を損ねる汚染問題となりますし、それを上手に活用できれば暮らしに役立つ有用な資源となります。とはいえ、日常の暮らしの中で、し尿や家畜糞は、私たちの意識の外に押し出されてきたように感じませんか？</p> <p>世界的に人口の局在化(都市域への流入と農村域からの流出)やライフスタイルの変化が進む中、これまでのように「臭いものに蓋」をすることに限界が来ています。一方で、これまでに蓄積された暮らしの知恵や処理技術、利用の仕方には様々なものがあります。そこには、これからの暮らしの向上や環境問題の解決に資するヒントが隠されているようです。</p> <p>このセミナーでは、し尿や家畜糞をテーマに、日本やアジア、アフリカの事例を参照しながら、それへの向き合い方を考えてみます。</p>

*** プログラム ***

(※クリックすると、詳細をご覧になれます。)

地球研・北大合同地球環境セミナー
 臭いものに蓋をしない? 「フン」をめぐる文化論や技術論—アフリカやアジアの事例から—

●日時: 2015年11月8日(金)、13:30~17:30
 ●場所: 北海道大学農学部大講堂
 ●主催: 北海道大学工学研究院、総合地球環境学研究所
 ●協力: 北海道大学農学研究院、新学域設置構想委員会・農学系専門委員会(国際食資源学座)、日本アフリカ学会北海道支部
 ●趣旨
 し尿や畜糞、産業物は、私たちがすぐ身の回りにあります。その扱いを誤れば衛生や環境を壊る汚染問題となりますし、それを上手に活用できれば暮らしに役立つ有用な資源となります。とはいえ、日常の暮らしの中で、し尿や畜糞は、私たちの意識の外に押し込まれてきたように感じませんか?
 世界的に人口の増え(都市圏への流入と農村域からの脱出)やライフスタイルの変化が進む中、これまでのように「臭いものに蓋」をすることに限界が来ています。一方で、これまでに蓄積された暮らしの知恵や技術、利用の仕方には様々なものがあります。そこには、これからの暮らしの向上や環境問題の解決、未来社会のあり方を探るヒントが隠されているようです。
 このセミナーでは、し尿や畜糞への向き合い方を、日本やアジア、アフリカの事例を参照しながら、それへの認識や文化・社会との関わり、食料生産などの資源利用、環境負荷の軽減など複数の観点から考えてみます。
 ●プログラム
 受付・開場 13:00~13:29
 開会 13:29~13:30 (1分) (船水 尚行、[北海道大学・工学研究院])
 挨拶 13:30~13:36 (5分) (横田篤、農学研究院長、新学域設置構想委員会・農学系専門委員会 [国際食資源学座])
 趣旨説明(解題) 13:36~13:50 (15分) (石川智士、総合地球環境学研究所・准教授)

 発表(発表 30分、質疑応答 10分)
 発表1 13:50~14:30
 ヒンドゥー教における牛糞の儀礼的意味と利用(小幡学、神戸山手大学・現代社会学部・教授)
 発表2 14:30~15:00
 環境社会と糞尿利用(游田和則、北海道大学農学研究院・教授)
 [休憩 15:00~15:30]
 発表3 15:30~16:00
 西アフリカ・内陸半乾燥地の地域開発支援に畜糞を活かす
 (田中樹、地球研・准教授、 宮妻英寿、地球研・研究員)
 発表4 16:00~16:40
 糞便を工学的に見る (船水尚行、北海道大学工学研究院・教授)
 [休憩 16:40~16:50]
 総会討論 16:50~17:30
 閉会のことば 17:30~17:38 (田中樹、地球研・准教授)

北海道大学側の実施責任者 大学院工学研究院 環境創生工学部門 教授 船水 尚行

事前申し込み 無し(直接会場へお越し下さい)

参加費 無料

問い合わせ先 大学院工学研究院 環境創生工学部門

船水 尚行

E-mail: funamizu[at]eng.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

し尿や家畜糞、廃棄物は、私たちのすぐ身の回りにあります。その扱いを誤れば衛生や環境を損ねる汚染問題となりますし、それを上手に活用できれば暮らしに役立つ有用な資源となります。とはいえ、日常の暮らしの中で、し尿や家畜糞は、私たちの意識の外に押し出されてきたように感じています。

このセミナーでは、し尿や家畜糞への向き合い方を、日本やアジア、アフリカの事例を参照しながら、それへの認識や文化・社会との関わり、食料生産などの資源利用、環境負荷の低減など複数の観点から考えることを試みました。

セミナーではまず、『ヒンドゥー教における牛糞の儀礼的意味と利用』と題した講演を小磯学先生(神戸山手大学・現代社会学部)が行い、インドにおける牛糞について議論しました。次に、農学の観点から、岩淵和則先生(北海道大学農学研究院)が『循環社会と糞尿利用』という題名で講演を行い、バイオガスや堆肥としての糞尿利用をとりあげました。宮崎英寿先生(総合地球環境学研究所)は、『西アフリカ・内陸半乾燥地の地域開発支援に家畜糞を活かす』という講演で、牧畜民と農民の家畜糞を介した共生関係について議論しました。最後に、船水尚行先生(北海道大学工学研究院)は『糞便を工学的に見る』と題した講演を行い、糞便の価値を高める技術とその西アフリカでの適用例を議論しました。

最後の総合討論では多くの質問が出され、これらをもとに活発な議論が行われました。



講演会の様子



講演に耳を傾ける聴衆の様子



留学希望者向けセミナー SD on Campus

行事内容

開催日時	2015年11月6日(金)18:10~20:10 (終了しました)
主催者	北海道大学 国際本部
会場	北海道大学 国際本部(詳細はウェブサイトにて確認ください)
言語: 英語(通訳なし)	対象: 大学生・院生

行事概要

環境を破壊せず、資源と共に持続できる社会発展を目指す「サステナブル・ディベロプメント(SD)」について、海外の協定大学がどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを、北海道大学短期留学プログラム(HUSTEP)の留学生等に、学生目線で情報提供を行ってもらい考える、学生向けのセミナーです。



日時: 平成27年11月6日(金) 18:10~20:10

場所: 国際本部1階大講義室

プログラム

・開会 国際教務課 石黒 公英

・開会

(挨拶)

留学課・国際本部長 上田 一博

1. Sustainable Development(SD)について
文学研究科 教授 藤本 崇徳

2. 協定大学でのSD教育への取組みおよび学生の参加状況について

・アメリカ・ホーランド・協立大学 Ms. Yae Lin

・ベトナム・ベトナム国際大学ホーチミン校 International University

Ms. Nguyen Ngoc Thuy Giang

・オーストラリア・エボニコ立大学 Ms. Eriko Ann Nkechi / Ms. Chukwu Abigail

Doyikenna / Ms. Ede Augustine Tassy Ikoku

・インドネシア・ガジャマダ大学 Ms. Nur Anice Merdhanikah, Mr. Dhanang

Rachmanda Fhri, Ms. Hanum Saizabilla, Ms. Dina Alni Faltmah

3. 協定大学への留学について

国際教務課 石黒 公英

4. Q&A Session

※会場が狭いため質問コーナーです。日本語での質問も受け付けます。

・閉会

北海道大学側の実施責任者	北海道大学大学院文学研究科 教授 瀬名波 栄潤
事前申し込み	必要(※2015年11月6日をもって申し込み受付は終了しました)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 国際本部国際教務課 河野 公美 TEL: 011-706-8053 E-mail: jryugaku[at]oia.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送付ください)

実施報告

昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、アメリカ・ポートランド州立大学、インドネシア・ガジャマダ大学、ベトナム・ベトナム国家大学ホーチミン校、ナイジェリア・エボニ州立大学の4大学でした。学生の目線での情報提供を目的に、発表者を北海道大学短期留学プログラム(HUSTEP)で交換留学している留学生に依頼しました。

イベントでは、各大学がサステナブル・ディベロプメント(SD)についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されました。また、イベント後半ではナイジェリアの伝統的なダンスが披露されました。

本イベントは本年度で8度目の開催ですが、参加した学生達に実施したアンケートでも「様々な国の大学の話を聞けて良かった」、「海外の大学を生で感じられた」などの回答がみられました。また、発表した留学生も自らの大学を直接アピールできる貴重な機会とらえて十分な準備を重ね、当日も満足感を抱いていたようでした。参加学生のアンケートでは、来年度に講演してほしい大学の希望についても聴取することができたので、可能な限り希望を取り入れていきたいと考えています。



上田国際本部長からの冒頭挨拶



講演者への表彰状贈呈式の模様



主催者と講演者の集合写真

国際シンポジウム 地域社会へ与える考古学の影響

—ポストコロニアル時代の考古学と先住民コミュニティ—



行事内容

開催日時 2015年11月7日(土)13:00~17:30(開場 12:30)、11月8日(日)10:00~17:30(開場 9:30)
(終了しました)

主催者 北海道大学 アイヌ・先住民研究センター

共催 北海道大学 観光学高等研究センター

後援 世界考古学会議 WAC-8京都実行委員会

会場 学術交流会館(講堂)

言語: 日本語・英語(逐次通訳あり)

対象: 専門家・一般市民・大学生・院生・高校生

行事概要

本国際シンポジウムは、来年度京都で開催される世界考古学会議(4年に一度開催される世界的な国際会議であり、アジアで初めての開催)の連携企画として、先住民族と考古学の関わりについて広く世界的な視点から議論します。

先住民族の権利回復と、その独自の歴史を理解するためには、従来の植民地主義的観点を脱した新たな視座の構築と先住民族との協業が求められています。本シンポジウムは、アイヌ民族の大地である北海道において世界各地の今日的な課題を検証し、今後の国際的な議論をリードする新たな視座を提示するために企画するものです。

2015年 11月7日(土) 13:00~17:30 (開場 12:30)
11月8日(日) 10:00~17:30 (開場 9:30)
北海道大学 学術交流会館 講堂

George Nicholas (Simon Fraser University)
Susan Floney (University of British Columbia)
Carl Gosla (Ojala University of Utenasa)
後援: 北海道大学
協賛: 観光学高等研究センター
小野 哲也 (経済的地理学専攻)
大西 篤之 (民俗学専攻)
森岡 健治 (学術的伝達学専攻)
真野 隆 (平野利アイヌ文化伝達所)

主催: 北海道大学 アイヌ・先住民研究センター
TEL: 011-706-2480 E-mail: ainu@hokudai.ac.jp
http://www.ainu.hokudai.ac.jp
http://sustainable.hokudai.ac.jp/en/2015/11/07/151107sympo.html

北海道大学側の実施責任者	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤 博文
事前申し込み	無し(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	アイヌ・先住民研究センター 加藤 博文 TEL : 011-706-2859 E-mail: ainu[at]let.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)
URL	http://www.cais.hokudai.ac.jp

実施報告

本シンポジウムでは、持続可能な発展(Sustainable Development, SD)に具体的に貢献する手法として、考古学や文化遺産研究が先住民族を含む地域社会に対してどのような貢献が可能なのかについて、ブリテュッシュ・コロンビア大学、サイモン・フレーザー大学、国立台湾大学、ウプサラ大学、アバディーン大学から研究者を招き、北海道内の2つの自治体での取り組みとの比較検討を行いました。

提供された話題は、広く北米、東アジア、北欧、北海道における大学や自治体の地域のアイヌコミュニティとの協業の具体的な事例におよび、先住民族を含む地域社会と研究活動のあり方についての今日的な課題を論じる貴重な機会となりました。北東アジア圏に位置し、国内唯一の先住民研究拠点を有する本学でのシンポジウムの開催は、北海道の地が北米と北欧とを繋ぎ、さらに東アジア地域を取り込む国際的な研究交流の結節点として重要な立ち位置を占めていることを改めて提示する結果となり、多くの参加者から高い評価を得ることができました。

本事業は、2016年8月末から9月上旬に京都において開催される「世界考古学会議京都大会」の関連事業に位置付けられ、世界考古学会議の事務局、京都大会現地実行委員会事務局からも討論者の参加があり、今回の議論は、引き続き京都での国際会議へと継続されることになりました。海外からの参加者からは、本学に対して今後も海外の研究機関をつなぐハブ的な役割を期待する意見が寄せられました。シンポジウム以外でも大学院講義(北大院生5名、海外留学生4名)を利用した参加講師と議論するラウンドテーブルを実施しました。海外の研究者との直接交流は、学生にとって貴重かつ刺激的な経験となりました。学生からは、活発な質問もなされ、非常に高い満足度が得られました。



パネルディスカッションの様子



シンポジウム参加者の集合写真



行事内容

開催日時	2015年11月7日(土) (終了しました)
主催者	北海道大学大学院歯学研究科
会場	北海道大学 歯学部講堂
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>生活の質を左右する要素の一つに、食事があります。本企画はこの「食事」を楽しくするために必要なお口の健康と、問題が発生した場合の対処法・治療法についてご紹介します。</p> <p>お話上手な講師たちが、皆様にわかりやすく伝えるため、講演会を開催いたします。ご好評であれば今後、シリーズ化して継続的に提供していこうと考えています。みなさま奮ってご参加ください。</p>
北海道大学側の実施責任者	歯学研究科 講師 有馬太郎
事前申し込み	必要(申込みサイトから、または電話、FAXにて11/4まで受付)(※申込受付を終了しました)
参加費	無料
問い合わせ先	<p>北海道大学大学院歯学研究科</p> <p>有馬太郎</p> <p>Tel:011-706-4275</p> <p>E-mail: tar[at]den.hokudai.ac.jp (※[at]は@に変えて送信ください)</p>

実施報告

歯学研究科では、平成27年11月7日(土)9時30分から13時00分まで歯学部講堂において、市民公開特別講座として「お口の健康と歯科医療 その1」を開催しました。

本講座はサステナビリティ・ウィークとの共催であり、歯学研究科としては8つめの企画でした。同講座では、食事を楽しくするために必要なお口の健康と、問題が発生した場合の対処法・治療法について紹介することを目的として、一般の方でも十分理解できるわかりやすい言葉で4名の講師が講演を行いました。

始めに、大学院歯学研究科長・歯学部長 横山 敦郎 教授から開会の挨拶があり、次いで北海道大学病院 兼平 孝 講師から「食の歴史」について、大学院歯学研究科 松沢 祐介 助教から「歯の再殖」について、北海道歯科衛生士会・札幌北榆病院歯科衛生士 原田 晴子 氏から「歯磨きのタイミング」について、最後に、大学院歯学研究科 有馬 太郎 講師から「顎関節症」についての講演が行われました。

また、同講座は国立大学フェスタの行事及び道民カレッジ連携講座としての開催でもありました。当日は少し風が強く、銀杏並木の観光客も少なかったために観光がてらに参加される方が今年は少なかったのですが、25名の方が参加されました。しかし参加者の中には、インターネットで3年前に本講座を知って以来、毎年恵庭から来て下さる方もいて、感謝するばかりです。本研究科では、今後も研究成果の地域社会への還元の一環として、道民カレッジ等に参加し、市民公開特別講座を企画・実施する予定です。また、サステナビリティ・ウィークにも「持続的に」話題を提供してまいります。



兼平 講師による講演の様子



原田歯科衛生士による講演の様子



研究倫理国際ワークショップ —教育方法とその有効性の検証—

行事内容

開催日時	2015年11月7日(土)13:00~18:00 (終了しました)
主催者	大学院文学研究科 応用倫理研究教育センター
共催	サンクトペテルブルグ国立大学(ロシア)、ブカレスト大学(ルーマニア)
会場	人文・社会科学総合教育研究棟 W409室
言語: 英語(通訳無し)	対象: 専門家・大学生・院生
行事概要	<p>本企画は、北海道大学と、協定校のロシア・サンクトペテルブルグ国立大学、ルーマニア・ブカレスト大学の3校において実施された研究倫理の教育実践報告を通して、研究倫理教育教材の有効性を検証します。また、既存の教材の改善を狙いつつ、新しいスタンダード教材の研究開発に向けた議論を行います。</p> <p>日本・ロシア・ルーマニアにおける研究不正の現状と、それに対する取り組みをご紹介するとともに、研究倫理推進のための方策について検討を行います。</p> <p>研究に携わる専門職業人としての研究者の徳目という視座より、サステイナブルな社会の実現を考えます。</p> <p>ポスター</p> <p>(※画像をクリックすると、詳細がご覧になれます)</p>



北海道大学側の実施責任者	北海道大学大学院文学研究科 准教授 眞嶋 俊造
事前申し込み	無し(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院文学研究科 応用倫理研究教育センター TEL: 011-706-4088 E-mail: erikashibata[at]let.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

2015年11月7日(土曜日)、文学研究科・応用倫理研究教育センター主催で開催された本ワークショップでは、本学の大学間協定校であるロシア・サンクトペテルブルグ国立大学、並びにルーマニア・ブカレスト大学より研究者を招へいし、各国における研究倫理教育の現状と課題についての国際比較、本学並びに両協定校において実施された研究倫理教育実践報告を通じた研究倫理教育の取り組み、また教育手法の有効性について検証を行いました。

第一部は「研究倫理教育の最近の動向」と題し、日本、各国における現状を検討しました。ここでは、わが国における研究倫理教育の現状は十分ではないが、他2国のそれと比較すると、より多角的かつ有効な取り組みが実施されていることが明らかになりました。特に、日本と、他2国との大きな違いの一つは、研究不正を行った場合の社会からの制裁だけではなく、同僚や研究者コミュニティからの扱われ方にあることがわかりました。

第二部は「教材の有効性の検証」と題し、本学並びに両協定校において実施された研究倫理教育実践報告を通じた研究倫理教育の取り組み、また教育手法の有効性について検証を行いました。ここでは、現状ではそれぞれの機関において全学的に標準化された研究倫理教育が行われていないが、その取り組みがそれぞれの方法で進められていることが明らかになりました。

第三部では活発なディスカッションを通し、講演者間のみならずフロアを交えた参加者の間で議論を深めることができました。本ワークショップで得られた新しい知見と成果は、本学と両協定校だけではなく、日本、ロシア、ルーマニア、さらに他の国々における研究倫理推進を進めるにあたって大きな示唆を与えるものでした。具体的には、社会における研究者の地位や位置づけや、研究者が研究に携わる専門職業人であるという意識と認知によって、研究活動に対する研究者の姿勢、また研究不正に対する社会からの反応に違いがあることがわかりました。

また、研究倫理教育を推進していくためには、研究者を研究に携わる専門職業人としてとらえ、研究倫理教育を専門職倫理教育として実施する必要性が明らかになりました。本学と両協定校を軸とし、国際的な研究倫理教育のネットワークを世界展開するための共同研究のシーズを得ることができました。



講演の様子



講演の様子_2

GiFT2015 —Global Issues Forum for Tomorrow—

世界の課題解決に向けたフォーラム



行事内容

開催日時 2015年11月8日(日)20:00～22:00 (予定) **(終了しました)**

主催者 北海道大学 サステナビリティ・ウィーク事務局(国際本部国際連携課内)

会場 インターネット上

言語: 英語 **対象:** 大学生・院生・高校生

行事概要

地球温暖化の影響を極めて受けやすい、北極周辺の地域。その課題解決に多様な観点から挑んでいる、4名の北海道大学の研究者が、世界の高校生・大学生に向けて研究活動を熱く語るインターネット・フォーラムです。

11月8日、夜8時からの放送に合わせ、SNSと連動し、視聴されている方からご意見や感想も募集します。「一緒に世界の重要課題に挑もう！」と呼びかける研究者と、世界各国の学生と共に、世界の課題解決について考え、熱く議論をしてみませんか。

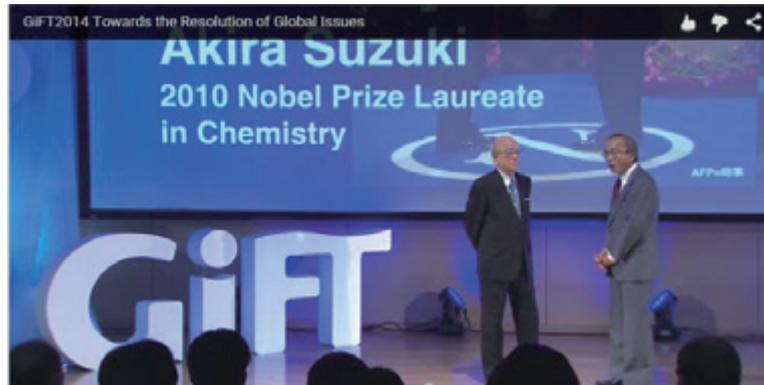
今年のテーマ

今年のテーマは、「北極圏の気候変動が引き起こす全地球規模の変化に、わたしたちはどのように対応したらよいか」です。

(※画像をクリックすると、ウェブサイトにて講演プログラム(英語のみ)がご覧になれます。)

昨年のGiFTの様子

(※画像をクリックすると、YouTubeページで動画がご覧になれます。)



* 昨年度の様子 詳しくはこちら:

<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp/2014/gift2014/>

* GiFT公式ウェブサイト:<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/index.html>

北海道大学側の実施責任者	サステナビリティ・ウィーク実行委員会実行委員長 上田 一郎（北海道大学理事・副学長）
事前申し込み	不要
参加費	無料
問い合わせ先	サステナビリティ・ウィーク事務局 TEL:011-706-8031 E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください) Facebook: http://www.facebook.com/SW.Hokkaido.u
URL	http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/index.html

実施報告

11月8日(日)、北大生と世界の高校生・大学生がインターネット上で意見交換するフォーラム「GiFT -Global Issues Forum for Tomorrow-」を開催しました。

本フォーラムは、『北大近未来戦略150』で掲げる「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」というテーマのもと、より多くの若者が世界の課題解決に向けて行動するよう促すことを目的とし、今年で5回目の実施となりました。

フォーラムでは、持続可能な社会の実現に挑む北海道大学の研究者が、世界の課題解決の方策について、何ができるのかを一緒に考えようと英語で学生にインターネット動画を通して呼び掛けました。本年の司会進行は北大の日本人学生と留学生が務め、延べ267名が世界からフォーラムに参加し、12月9日現在、動画は1823回視聴されています。

今年度の議題は、「北極圏の気候変動が引き起こす全地球規模の変化に、わたしたちはどのように対応したらよいか」です。初めに、山口 佳三 北海道大学総長が地球規模の問題解決を目指す上で、大学が果たす役割と協働研究の重要性を語りました。続いて、地球環境科学研究所の杉本 敦子教授が永久凍土周辺の環境問題と住民への教育を、また、北極域研究センター長 齊藤 誠一教授は、衛星で捉えた海中プランクトンの移動と北極域の生態系の変化予測を紹介しました。最後に、工学研究所 建築都市空間デザイン部門の瀬戸口 剛 教授が、稚内駅の再建を例とした自然環境と調和する都市設計について語りました。これに呼応し、参加者はチャットを通じて世界の課題解決に向けた意欲やアイデアを活発に交換しました。

アーカイブ動画はこちらで公開中です。<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/year2015.html>



協働研究について講演をする山口総長



司会を務めた学生の様子



行事内容

開催日時	2015年11月10日(火)～2015年11月12日(木) (終了しました)
主催者	北海道大学
共催	ラップランド大学, オウル大学
会場	百年記念会館、創成研究機構
言語: 英語	対象: 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>本シンポジウムは、今回で5回目の開催となります。今年のオープニングセッションでは、ラップランド大学(フィンランド)、オウル大学(同)、ヘルシンキ大学、東フィンランド大学、UArctic、北海道大学の代表者が相互交流を図るとともに、更なる発展を目指して国際化にかかる討論を行います。</p> <p>また、分科会では「Maritime(海)」「Population(人)」「Innovation(イノベーション)」等のキーワードを切り口に最新の研究成果を共有し、今後の協力の可能性について議論します。</p> <p style="text-align: center;">* パンフレットはこちらから *</p> <p>(※クリックすると詳細がご覧頂けます)</p>



オープニングセッション

11月10日(火) 14:00-17:45

今、北極域の研究に世界中の関心が集まっています。北極をめぐるどのような課題が生じているのか。その課題に、北海道大学やフィンランドの大学はどのように取り組んでいるのか。今年4月に開設した「北海道大学北極域研究センター(ARC-HU)」を始め、多彩な背景を持つ専門家による複数の報告により最新情報を共有し、今後の教育研究の在り方について議論します。

* 会場: 百年記念会館 大講堂

* 言語: 英語(同時通訳あり)

研究者間の討論を中心とした専門分科会

11月11日(水) 9:30-17:15

分科会キーワード:

- ・北極の海洋環境と海事
- ・北極の人口
- ・北極の持続可能な開発のためのイノベーション

* 会場: 創成研究セミナー室

* 言語: 英語(通訳無し)

クロージングセッション

11月12日(木) 14:00-16:30

各分科会の議論内容を共有し、今後の協働の在り方について議論します。

* 会場: 百年記念会館 大講堂

* 言語: 英語(同時通訳あり)



北海道大学側の実施責任者	国際本部国際交流課 課長 清水 和子
事前申し込み	無し(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	国際本部 国際交流課 E-mail: gi-core[at]oia.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください) TEL: 011-706-8029

実施報告

11月10日(火)から11月12日(木)にかけて、『北海道大学ーフィンランド ジョイントシンポジウム』を開催しました。本シンポジウムは、北大が2007年以来毎年開催している「サステナビリティ・ウィーク」の企画として、オウル大学とラップランド大学との共催により開催されたものであり、オウル大学、ラップランド大学、本学を中心に約80名の参加がありました。

今年度のテーマは、「北極域の持続可能性に貢献する大学の役割」とし、初日に開催されたオープニングセッションでは、北大の山口 佳三 総長の開会挨拶の後、北大北極域研究センター 齊藤 誠一 センター長より基調講演がありました。

続いて、北大 上田 一郎 理事・副学長、オウル大学 ヨウコ・ニイニマキ 学長、ラップランド大学 マウリ・ユラコトラ学長、東フィンランド大学 ユッカ・モンコネン学長、ヘルシンキ大学 アンナ・マウラネン副学長、北極圏大学(※)のカリ・ライネ副学長による各大学の取り組み内容の紹介が行われました。

その後、本学ヘルシンキオフィス 成田 吉弘 所長をモデレータとしたパネルディスカッションにて、参加者を含めた活発な議論が行われました。開催期間中には、この他に「北極域における海洋・海事」、「北極域における人口」をテーマとした分科会及び、「北極域での資源開発」「北方圏における学術コンソーシアム」に関するセミナーが開催され、幅広い分野での議論が行われました。

これまでも本学と活発な交流を進めてきたフィンランドですが、このシンポジウムにおいて、さらなる関係強化への期待が双方から表せられました。

(※University of the Arctic: カナダ、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、ロシア、スウェーデン及びアメリカ合衆国(Arctic8)を中心とした、北方圏における課題に関する教育研究のための教育機関ネットワークです。)



講演の様子



パネルディスカッションの様子



シンポジウム参加者の集合写真

次世代コージェネレーションシステム公開シンポジウム
～コージェネレーションネットワークの普及に向けて～



行事内容

開催日時	2015年11月10日(火)13:00～16:00 (終了しました)
主催者	北海道大学 エネルギー変換システム研究室
会場	フロンティア科学研究棟 鈴木章記念ホール(レクチャーホール)
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>電力と廃熱の両方を有効利用できる「コージェネレーション」は、熱需要の大きな北海道において特に温室効果ガス削減に有効な省エネルギー技術です。この能力を十分に引き出せるものとして、コージェネレーションを電力系統によってネットワーク化し、余剰電力融通を行う「分散協調型コージェネレーションシステム」を提案しております。</p> <p>このコスト・CO₂削減効果解析に加えて、分散協調型コージェネレーションの普及にあたっての政策的な条件検討等を行っておりますので、環境研究総合推進費による現時点までの研究成果を報告します。</p> <p>併せて、日本のエネルギー政策や札幌市のエネルギー施策、ならびにコージェネレーション普及の現状等について、関連専門家から基調講演をいただきます。北海道の将来エネルギー形態を考える上で有益なシンポジウムですので、ふるってご参加ください。</p>

* スケジュール *

基調講演 13:00～14:15

「低炭素社会に求められるエネルギーシステムの条件」

永田 豊(電力中央研究所 社会経済研究所 副研究参事)

「コージェネレーションとスマートコミュニティ」

武政 英次(コージェネレーション・エネルギー高度利用センター
事務局長)

「札幌都心エネルギー施策の検討について」

樫山 和哉(札幌市 市民まちづくり局 エネルギープロジェクト担
当係長)

環境推進研究成果報告 14:30～16:00

「分散協調型コージェネレーション概念とCO₂削減・経済波及効果」

近久 武美(北海道大学工学研究院 教授)

「ヨーロッパにおける地域熱供給システムの動向と独立型及び分散協調型
コージェネレーションの費用便益比較のケーススタディ」

吉田 文和(北海道大学経済学研究科 名誉教授)

* 会場 *

会場名：北海道大学フロンティア科学研究棟 鈴木章記念ホール(レクチャ
ーホール)

詳細はこちらのウェブサイトよりご確認頂けます。

<http://www.eng.hokudai.ac.jp/building/detail.php?area=2>

北海道大学側の実施責任者 北海道大学 大学院工学研究院 教授 近久 武美

事前申し込み 不要

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学 工学研究院

Tel: 011-706-6785

E-mail: hieda[at]eng.hokudai.ac.jp (※[at]は@に変えて送信ください)

実施報告

本行事は、2013年4月から3年に亘って行われてきた環境研究総合推進費研究委託業務「コージェネレーションネットワーク構築のためのCO2削減・経済性・政策シナリオ解析」の研究成果を、北海道内の企業・行政・一般市民に対し広く発信することを目的として開かれました。

この委託研究は、北海道地域におけるコージェネレーション(以下コージェネ)の普及促進によるエネルギーシステムの低炭素化と地域経済の活性化を目指すもので、需要家サイドに分散配置されたコージェネを既存電力システムによってネットワーク化する効果を明らかにするとともに、その実現に有効な政策的手法を提案するものです。

シンポジウム前半では、電力中央研究所・コージェネレーション高度利用センター・札幌市よりお招きした3名の講師の方々に、日本・北海道のエネルギー情勢の現状と課題、コージェネ普及の現状と今後の取組、札幌市におけるエネルギーシステム低炭素化のための取組についてご講演いただきました。後半は、工学研究院の近久 武美教授よりコージェネのネットワーク化によるCO2排出量削減効果と経済波及効果について、続いて経済学研究科の吉田 文和名誉教授、外山 洋一教授より海外調査の成果と政策的手法について、それぞれ研究成果を報告しました。

参加者は120名程度と当初の予想を上回り、講演後には活発な質疑が行われ、盛況のうちに会を終了しました。今後はプロジェクト成果を取りまとめて委託研究を完成させると共に、提案実現に向けて社会への発信を続けていきたいと考えています。



近久教授による講演の様子

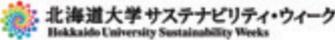


札幌市 山岡 様による講演の様子

社会インフラのスマートエイジングとアセットマネジメントを追及する学際研究



行事内容

開催日時	2015年11月13日(金)13:00~17:00 (終了しました)																												
主催者	北海道産官学研究フォーラム																												
共催	北海道大学大学院情報科学研究科, NPO法人Digital 北海道研究会, 地理情報システム学会, 産学官 CIMGIS 研究会																												
後援	写真測量学会北海道支部, 建設コンサルタンツ協会北海道支部土木学会北海道支部, 精密工学会北海道支部, 北海道GIS技術研究会																												
会場	工学部フロンティア応用科学研究棟 レクチャホール																												
言語: 日本語	対象: 専門家・一般市民・大学生・院生																												
行事概要	<p>喫緊の社会的課題である社会基盤施設の急激な老朽化に対処するために、学際的な研究開発の取り組みが必要となっています。</p> <p>本セミナーでは、本学の研究者を中心に、社会基盤施設の長寿命化や効率的な維持管理投資計画を実現するための要素技術に携わる学内外の研究者の取組みを学内の教職員および、一般市民や学外の専門家へ横断的に紹介し、今後の社会実装に向けた学間や産学間の連携を図ることを目的としています。</p>																												
 <p>北海道大学サステナビリティ・ウィーク Hokkaido University Sustainability Weeks</p> <p>特別セミナー 『社会インフラのスマートエイジングとアセットマネジメントを追及する学際研究』 Interdisciplinary research for smart-aging and asset management of social infrastructure</p> <p>日時: 2015年11月13日(金) 13:00~17:00 場所: 北海道大学 フロンティア応用科学研究棟 2F レクチャールーム 趣旨: 喫緊の社会的課題である社会基盤施設の急激な老朽化に対処するために学際的な研究開発の取り組みが必要となる。本セミナーでは、本学の研究者を中心に、社会基盤施設の長寿命化や効率的な維持管理投資計画を実現するための要素技術に携わる学内外の研究者の取組みを学内の教職員および一般市民や学外の専門家へ横断的に紹介し、今後の社会実装に向けた学間や産学間の連携を図ることを目的とする。</p> <p>講演: (講演 40分 (質疑応答含む))</p> <table border="0"> <tr> <td>司会</td> <td>北海道大学大学院情報科学研究科</td> <td>教授</td> <td>金井 博</td> </tr> <tr> <td>あいさつ</td> <td>北海道大学大学院工学研究科</td> <td>教授</td> <td>橋本 隆一 氏</td> </tr> <tr> <td>1.</td> <td>「社会インフラのスマートエイジングのための信頼性工学」(13:30~13:50)</td> <td>北海道大学大学院工学研究科</td> <td>教授 横田 弘 氏</td> </tr> <tr> <td>2.</td> <td>「高齢化率を高い大規模施設の施設維持管理」(13:50~14:30)</td> <td>北海道大学大学院情報科学研究科</td> <td>教授 金子健一 氏</td> </tr> <tr> <td>3.</td> <td>「社会インフラ維持管理情報の信頼性確保に向けた信頼性評価基盤構築」(14:30~15:10)</td> <td>北海道大学大学院情報科学研究科</td> <td>准教授 田中文基 氏 (休職)</td> </tr> <tr> <td>4.</td> <td>「産内の社会インフラ維持管理におけるICT活用への期待」(15:20~16:10)</td> <td>北海道大学 公共政策大学院</td> <td>特任教授 高松 肇 氏</td> </tr> <tr> <td>5.</td> <td>「維持管理を見据えたGISの活用事例」(16:10~16:50)</td> <td>情報学 企画調査課</td> <td>平野誠一 氏</td> </tr> </table> <p>主催: 北海道産官学研究フォーラム/北海道 GIS・CPS 研究会 共催: 北海道大学大学院情報科学研究科, 産学官 CIMGIS 研究会, NPO 法人 Digital 北海道研究会, 地理情報システム学会 後援: 写真測量学会北海道支部, 建設コンサルタンツ協会北海道支部 主幹学会北海道支部, 精密工学会北海道支部, 北海道 GIS 技術研究会 主幹学会北海道支部, 建設工学会北海道支部, 北海道 GIS 技術研究会</p> <p>連絡先: 大学院情報科学研究科 教授 金井 博 hasegawa@ipc.hokudai.ac.jp 参加費: 無料 (ただし、印刷資料希望者は実費1000円を当日お支払いください) 事前参加申し込み: 不要 (連絡先へお申し込み)</p>		司会	北海道大学大学院情報科学研究科	教授	金井 博	あいさつ	北海道大学大学院工学研究科	教授	橋本 隆一 氏	1.	「社会インフラのスマートエイジングのための信頼性工学」(13:30~13:50)	北海道大学大学院工学研究科	教授 横田 弘 氏	2.	「高齢化率を高い大規模施設の施設維持管理」(13:50~14:30)	北海道大学大学院情報科学研究科	教授 金子健一 氏	3.	「社会インフラ維持管理情報の信頼性確保に向けた信頼性評価基盤構築」(14:30~15:10)	北海道大学大学院情報科学研究科	准教授 田中文基 氏 (休職)	4.	「産内の社会インフラ維持管理におけるICT活用への期待」(15:20~16:10)	北海道大学 公共政策大学院	特任教授 高松 肇 氏	5.	「維持管理を見据えたGISの活用事例」(16:10~16:50)	情報学 企画調査課	平野誠一 氏
司会	北海道大学大学院情報科学研究科	教授	金井 博																										
あいさつ	北海道大学大学院工学研究科	教授	橋本 隆一 氏																										
1.	「社会インフラのスマートエイジングのための信頼性工学」(13:30~13:50)	北海道大学大学院工学研究科	教授 横田 弘 氏																										
2.	「高齢化率を高い大規模施設の施設維持管理」(13:50~14:30)	北海道大学大学院情報科学研究科	教授 金子健一 氏																										
3.	「社会インフラ維持管理情報の信頼性確保に向けた信頼性評価基盤構築」(14:30~15:10)	北海道大学大学院情報科学研究科	准教授 田中文基 氏 (休職)																										
4.	「産内の社会インフラ維持管理におけるICT活用への期待」(15:20~16:10)	北海道大学 公共政策大学院	特任教授 高松 肇 氏																										
5.	「維持管理を見据えたGISの活用事例」(16:10~16:50)	情報学 企画調査課	平野誠一 氏																										

北海道大学側の実施責任者	大学院情報科学研究科 教授 金井 理
事前申し込み	不要
参加費	無料
問い合わせ先	大学院情報科学研究科 金井 理 TEL:011-706-6448 E-mail: kanai[at]ssi.ist.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

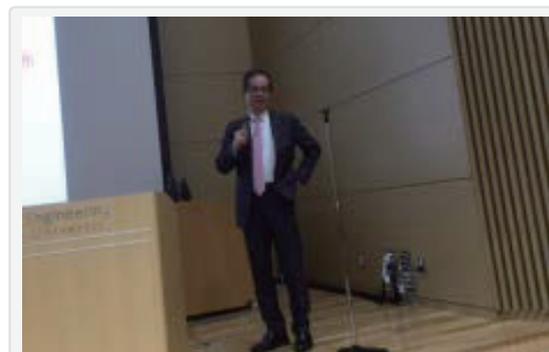
本セミナーは、近年日本の社会的課題の一つとして認識されてきた、「橋梁・トンネル・港湾設備等の社会基盤施設の急激な老朽化」に対処するための様々な技術や取り組みについて、一般市民や学外のエンジニアへ横断的に紹介しようと、今年度初めて開催されたセミナーです。工学研究院、情報科学研究科、文学研究科、公共政策大学院から多分野の研究者が集まり、また企業エンジニアも含めて、今後の社会実装に向けた学間や産学間の連携を図ることを目的として、開催しました。

このセミナーは(一社)建設コンサルタンツ協会継続教育(CPD)プログラムにも登録いただき、当日は非常に多くの道内の土木建設関係の民間企業、コンサルタント、官庁などから合計55名の聴講者が参加しました。当日は、コンクリート構造物の信頼性の予測技術、画像処理による橋梁の健全性計測、維持管理情報の長期間保存のための国際標準、維持管理におけるCIM・GISの先端的活用事例などについて、様々な観点から5件の発表がありました。

北大の多岐にわたる研究科において、社会インフラのスマートエイジングやアセットマネージメントを目指した、色々な観点での研究がなされていることが良く理解でき、今後の学間や産学官連携研究の実施に向けた人的ネットワークを作るうえで大変有意義な機会となりました。本学には、他にも、この分野に関連する研究に携わる多くの研究者が潜在的にいることも確認できたため、来年度もサステナビリティウィーク行事として、同様のセミナーを企画することを確認いたしました。



公共政策大学院 高松 泰 特任教授による講演の様子



工学研究院 横田 弘教授による講演の様子



2015 北の縄文フォーラム —縄文文化の魅力と価値について—

行事内容

開催日時	2015年11月15日(日) 14:00～16:30 (終了しました)
主催者	北海道環境生活部くらし安全局文化・スポーツ課縄文世界遺産推進室
共催	北海道大学
会場	札幌グランドホテル 別館2階 グランドホール
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>世界遺産登録を目指している北海道の縄文文化の素晴らしさや魅力を多くの方々に知っていただくとともに、広く道民の皆さんに縄文文化への理解を深めていただくため、基調講演とパネルディスカッションからなるフォーラムを開催します。</p> <p style="text-align: center;">*ポスター*</p> <p>(※画像をクリックすると、詳細をご覧いただけます。)</p>

北海道大学側の実施責任者	アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤 博文
事前申し込み	不要
参加費	無料
問い合わせ先	アイヌ・先住民研究センター 加藤博文 TEL: 011-706-4050 E-mail: h-kato@let.hokudai.ac.jp

実施報告

世界遺産登録を目指している、北海道の縄文文化の素晴らしさや魅力を多くの方々に知っていただくと共に、理解を深めていただくため、「縄文文化の魅力と価値」をテーマに公開フォーラムを開催しました。本フォーラムは、平成21年度から毎年開催されてきました。

今年度は、北海道庁の世界遺産推進室と北海道大学との共催という形で、北海道大学の大学間交流協定締結校であるイギリスのイースト・アングリア大学日本学センター長のサイモン・ケイナー博士を基調公演の講師に招き、「海外から見た縄文文化の魅力について」と題して、海外の目線から縄文文化のもつ世界史的価値、現代に至る日本文化の魅力についてお話いただきました。サイモン・ケイナー博士は、イギリスを代表する日本文化研究者として広く知られる存在であり、大英博物館において好評を得た「縄文土偶展」の企画責任者でもあります。

基調講演に続いて行われたパネルディスカッションでは、「縄文文化の価値とその活用」をテーマに、北海道の縄文遺跡群の特徴と可能性について、大学教授や関係自治体職員等をパネリストとし、考古学の現場やまちづくりの観点、観光資源としての活用の可能性など幅広いディスカッションが行われました。

参加者は、札幌市内の方が大勢を占めておりましたが、道内のその他の市町村、また道外からも出席いただき、237名と例年より多くの参加者を得ることができ、このテーマについての市民の関心の高さが改めて確認することができました。今後とも、本フォーラムに寄せられたご意見をもとに、北海道の縄文遺跡群の世界遺産登録を目指し、「縄文文化の魅力と価値」を、道内はもとより国内、海外へ発信してまいります。



講演会の様子



パネルディスカッションの様子

WHO研究協力センター指定記念講演会

—環境化学物質のハザードと人の健康障害の予防—



行事内容

開催日時 2015年11月16日(月) 15:00~17:00 (終了しました)

主催者 環境健康科学研究教育センター

共催 保健科学研究院、医学研究科

後援 札幌市、札幌市教育委員会

会場 百年記念会館

言語: 日本語・英語(同時通訳あり)

対象: 専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要

北海道大学 環境健康科学研究教育センターは、2015年4月にWHO(世界保健機関)「化学物質曝露によるハザードや健康障害予防に関する研究協力センター」に指定されました。

そこで、本企画では、「環境化学物質のハザードと人の健康障害の予防」をテーマにシンポジウムを開催します。化学物質の曝露によってどんな健康障害が起こりうるのか。日本のみならず、様々な国や地域ではどのような問題があり、どのような支援が必要とされているのか。WHOの環境と健康への取り組みや、各国とのネットワークや連携協力は。安全で持続可能な社会の実現にむけて、新たなWHO研究協力センターとしての課題と責任について考えます。

HOKKAIDO UNIVERSITY
Center for Environmental and Health Sciences

北海道大学 環境健康科学研究教育センター主催
WHO(世界保健機関) 研究協力センター指定記念講演会
**環境化学物質のハザードと
人の健康障害の予防**

2015年11月16日(月)
15:00~17:00 (14:45開場)
北海道大学 百年記念会館大会議室

内容
化学物質に汚染された環境は、健康に大きな影響を与える
ため、国内外でさまざまな問題が起り、どのような支援が
必要とされているのか、WHO西太平洋地域における
環境と健康の課題、化学物質による健康障害とその予防に
ついて現状を紹介し、安全で持続可能な社会の実現に向け、
今後の課題と責任を市民の皆さんと一緒に考えます。

◆司会
山内 健 (北海道大学環境健康科学研究教育センター長・北海道大学大学院保健科学研究科)
山内 太郎 (北海道大学環境健康科学研究教育センター国際連携部門長・北海道大学大学院保健科学研究科)

◆演者 (講演順、日英同時通訳)
梶西 健 (Director Programme Management, WHO, Western Pacific Regional Office)
Nasir Bin Hassan (Regional Coordinator, Health and the Environment, WHO, Western Pacific Regional Office)
岸 玲子 (Director, WHO Collaborating Centre for Environmental Health and Prevention of Chemical Hazards, 北海道大学環境健康科学研究教育センター)
石塚 真由美 (Professional staff, WHOCC, 北海道大学環境健康科学研究教育センター)

◆申し込み・問い合わせ
北海道大学 環境健康科学研究教育センター
TEL: 011-759-4748 FAX: 011-708-4725
E-mail: info@cehs.hokudai.ac.jp
URL: <http://sustain.ola.hokudai.ac.jp/en/sp/2015/who-symposium/>
会場: 東棟 5階

申し込みはTEL・FAX・Eメールのほか、上記URLの「申し込み」から、
申し込み書もダウンロードできます。

会場: 百年記念会館 大会議室(5階)
地図: 北海道大学環境健康科学研究教育センター

環境健康科学研究教育センター、環境健康科学研究教育センター、環境健康科学研究教育センター、環境健康科学研究教育センター、環境健康科学研究教育センター

北海道大学側の実施責任者	環境健康科学研究教育センター 教授 齋藤 健
事前申し込み	必要(当日参加可)(※申込受付を終了しました)
参加費	無料
問い合わせ先	環境健康科学研究教育センター 荒木 敦子 E-mail: info[at]cehs.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください) TEL: 011-706-4748
URL	http://www.cehs.hokudai.ac.jp

実施報告

本行事は、環境健康科学研究教育センターが世界保健機関の研究協力機関である「WHO Collaborating Centre (WHOCC) for Environmental Health and Prevention of Chemical Hazards (WHO研究協力センター)」に指定されたことを記念し、認証式および指定記念シンポジウムとして開催されました。

WHO西太平洋地域事務局よりDirector Programme Management(事業統括部長)の葛西 健氏と、担当官のNasir Hassan氏の2名に加え、厚生労働省と環境省の担当者を招へいし、百年記念会館大会議室が満席となる中で、認証プレート授与と祝辞が行われました。その後の指定記念シンポジウムでは、認証式の来賓者らも参加し、化学物質汚染と環境保健に関する以下の4演題が講演されました。

まずは、葛西 健氏 (WHO西太平洋地域事務局)より、「WHO and its Collaborating Centre's roles in rapidly changing world(急速に変化する世界におけるWHOとWHO研究協力センターの役割)」として、変わりつつある世界の構造、またこれまで以上に強く結びついている世界における健康に関するアプローチと、他国との関係を2国間から地球規模に転換させる必要性について、講演を行いました。

続いて、Nasir Bin Hassan氏 (WHO西太平洋地域事務局 医療環境地域コーディネーター)より、「Environmental health in the Western Pacific Region - Issues, challenges and future directions(西太平洋地域における環境衛生—その問題と課題、今後の方向性)」として、WHO 西太平洋地域の課題と環境保健の役割について話がありました。

3番目は、岸 玲子 特別招へい教授(WHO研究協力センター, 北海道大学環境健康科学研究教育センター)による、「グローバルな視点で環境化学物質による健康障害の予防を考える:WHOCCの活動に向けて」と題する、特に脆弱な人々をまもるためのWHOやアジア各国との協力の必要性についてでした。

最後に、石塚 真由美 教授(北海道大学大学院獣医学研究科)より、「アフリカにおける環境汚染の現状」というテーマで、途上国に共通する環境汚染の課題として、アフリカの鉛中毒を例に報告しました。

参加者アンケートからは、「あまりテレビなどで取り上げていない話で、とても興味を持った」、「環境汚染の状況が良くわかり大変、勉強になった」、「一般市民への高いレベルのお話、又は、誰でもわかりやすいお話を企画されていることに感謝します」といったコメントが得られました。世界規模で環境化学物質による汚染が懸念されるなかで、環境と健康の現状と課題を国連機関と研究者の異なる視点から紹介し、安全で持続可能な社会実現に向け、WHOと当センターが担うべき今後の課題と責任を市民と一緒に考える機会と致しました。



講演の様子



講演の聴衆の様子



行事内容

開催日時 2015年11月21日(土)～2015年11月23日(月) (終了しました)

主催者 北大映画館プロジェクト

会場 クラーク会館 大講堂

言語: 日本語 **対象:** 専門家・一般市民・大学生・院生・高校生

行事概要

今年で10年目を迎えるCLARK THEATER(クラークシアター)では、学生が主体となって多様なジャンルの映画を上映すると共に、映画にまつわるゲストを招待し、トークショーや特別プログラムを企画しています。

今年度は“先頭に立つ”“案内する”という意味を持つ「Lead」をテーマとし、映画業界を先導し後世に影響を与えた、またはこれから影響を与えるであろう優れた作品を取り上げたいと考えています。

多くの人々が作り上げてきた映画の歴史を振り返り、そしてこれから先の新しい可能性を感じることでできるプログラムを提供できればと考えています。

CLARK THEATERは、「映画」を通して知的好奇心を刺激し、優れた「映画」に出会うという豊かな時間を提供します。

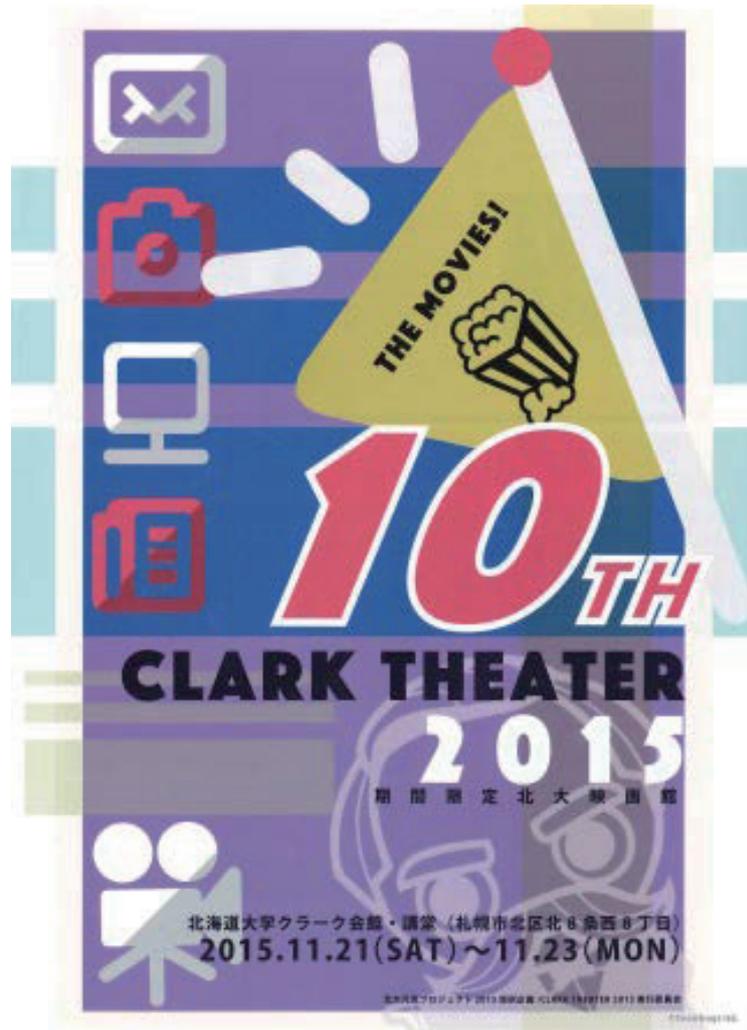
また、映画鑑賞という共通体験をとおして市民や学生のコミュニケーションの場を作り、持続可能な社会の発展へつなげていきたいと考えています。

また、10年を迎える節目の年にあたり、これまでご来場・ご協力いただいた多くの方に感謝の気持ちを表し、新たなスタートを切れるような年にしたいと考えております。

たくさんの方にご来場いただき、期間限定の北大映画館を楽しんでいただければ幸いです。心より皆さまのお越しをお待ちしております。

*** 行事詳細 / パンフレット ***

※画像をクリックすると、詳細がご覧いただけます。



北海道大学側の実施責任者 教育学部2年 曾束 芽吹

事前申し込み 無し(会場へ直接お越しください)

参加費 一部有料(詳細はウェブサイトまたはパンフレットにて確認ください)

問い合わせ先 北大映画館プロジェクト

E-mail: info[at]clarktheater.jp (※[at]を@に変えて送付ください)

URL <http://www.clarktheater.jp/>

実施報告

クラーク会館の講堂を使用し、学生や市民に開放した期間限定映画館「CLARK THEATER 2015」を開催しました。

当イベントは2006年に始まり、今年で10周年になります。北海道大学に常設映画館を作ることを目標に、その過程の一環として毎年開催している「CLARK THEATER」では、北海道大学生を中心とする学生が運営し、作品の選定から自分たちで行います。

今年はチェコアニメーション映画やフランス映画、中編日本映画など様々なジャンルの作品を上映しました。また、教授などを招いて映画についてより深く知るためのトークショーを企画、開催しました。

今年のテーマは「Lead(リード)」です。映画界を先導してきた名作SF映画、これから映画産業を担っていく最先端の技術についての映画を上映しました。映画の歴史を振り返ると同時に未来に繋がる可能性を感じていただき、映画の発展や映像技術に関する情報を発信し貢献することができたイベントになったと思います。

2125人の方に来場していただき、映画の良さを感じるとともに、北海道大学に映画館があることの魅力を伝えることができた実感しました。今後も、より多くの方に「CLARK THEATER」の魅力、そして私たち映画館プロジェクトの活動をを知ってもらい、常設映画館の創設に向け、さらに邁進していきます。



開演前の会場の様子



トークショーの様子



参加者の集合写真



行事内容

開催日時	2015年11月21日(土)13:00~16:00 (終了しました)
主催者	経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター(REBN)
共催	観光学高等研究センター
会場	人文・社会科学総合教育研究棟

言語: 日本語(通訳無し) 対象: 専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要

近年、日本への外国人旅行者数は観光業界の予想を上回る勢いで増加しています。外国人に人気の高い北海道でも同様です。しかし、急増する外国人観光客を迎えるための受け入れ体制は整っているとは言えず、宿泊施設、輸送手段、人材育成、自然環境保護など、さまざまな制約に直面しています。

本シンポジウムでは、増加する海外からの観光需要に対応するための課題について、北海道及び国内外でこの問題に長年取り組んでこられた2名の講師と共に、理解を深め北海道の観光の未来を考えていきたいと思っています。

ポスター

※画像をクリックすると、詳細をご覧いただけます。

北海道大学経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター(REBN)
2015年度シンポジウム
共催: 北海道大学観光学高等研究センター(CATS)

北海道の観光と地域振興 —インバウンド観光の先に見えるもの—

北海道は、豊かな自然、気候風土、文化・食文化、温泉地帯、観光地としての魅力を有しています。また、近年の観光需要の急増により、海外からの観光客(インバウンド観光)に向けて高い観光誘致、多様な観光体験の提供、観光客の滞在によって地域活性化を促すことが求められています。また、国内外で観光需要や観光政策に携わってこられた観光客(インバウンド)と、学術・観光客から北海道の魅力を海外に発信し、インバウンド観光の発展に力をおよぼしている観光客を講師としてお迎えし、北海道の各地域がどのように地域の魅力を高め、自らのライフスタイルをより豊かにしながら、国内外の人々を魅き付け、地域の活性化や発展に繋いでいるのかについて、観光の現場からご講演、ご議論いただけます。

北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W103
11月21日(土)
13:00~16:00(12:30開場)

参加自由・無料

講演
[1] 北海道観光アドバイザー、旅行ブローカー北海道 社長 須 野 洋 氏
「北海道におけるインバウンドビジネスのチャンス」
[2] 観光客・地域振興 観光客(インバウンド)と、学術・観光客 代表
北海道大学観光学高等研究センター 客員教授 山田 桂一郎 氏
「世界から選ばれる地域とは」

パネルディスカッション
コーディネーター 須 野 洋 氏
山田 桂一郎 氏
北海道大学観光学高等研究センター 小林 英俊 客員教授
コーディネーター 北海道大学経済学研究科 町野 和夫 教授

後援: 北海道、札幌市、日本自然環境教育、北海道銀行、北海道観光振興機構

北海道大学側の実施責任者	経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター長 町野 和夫
事前申し込み	無し(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター事務局 塚田 久美子 TEL: 011-706-4066 E-mail: sacade[at]econ.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)
URL	http://rebn.econ.hokudai.ac.jp/

実施報告

11月21日(土)、人文社会科学総合教育研究棟W103教室において、経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター(REBN)主催、観光学高等研究センター(CATS)共催、北海道、札幌市、日本政策投資銀行、北洋銀行、北海道観光振興機構後援によるシンポジウム「北海道の観光と地域振興—インバウンド観光の先に見えるもの」を開催しました。三連休初日にも拘らず、一般の方々を中心に140名の参加がありました。

本シンポジウムでは、まず(株)北海道チャイナワークおよび(株)プレミアム北海道の社長 張相律氏と、JTIC. SWISS代表、北海道大学観光学高等研究センター客員准教授で日本政府認定の「観光カリスマ」山田桂一郎氏にご講演いただきました。張氏からは「北海道におけるインバウンドビジネスのチャンス」、山田氏からは「世界から選ばれ続ける地域とは」というタイトルで、海外からの観光客(インバウンド)の急拡大を地域の生き残りや発展に繋げていくために、北海道の各地域がそれぞれの地域の魅力を磨き上げ、自らのライフスタイルをより豊かにすることがいかに大事かについて、多くの興味深い事例を交えてお話しいただきました。

シンポジウムの後半では、講師のお二人にCATSの小林英俊客員教授にも加わっていただき、REBNセンター長の町野をコーディネーターとするパネルディスカッションを行いました。観光の質を向上させ、地域のライフスタイルをより豊かにするために、業界、行政、地域住民が何をすべきかについて、前半の講演と小林教授の解説を基に、参加者からの質疑応答も含めて充実した議論が交わされました。



パネルディスカッションの様子



張社長による講演の様子



山田代表による講演の様子

同性パートナーシップ制度導入を考える



行事内容

開催日時	2015年11月22日(日)午後1時開場、午後1時半～4時半頃 (終了しました)
主催者	北海道大学大学院文学研究科 応用倫理研究教育センター
共催	法学研究科附属高等法政教育研究センター、同公共政策大学院
後援	国際本部サステナビリティ・ウィーク2015
会場	学术交流会館(講堂)
言語:日本語(通訳無し)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>同性愛者に、異性愛者間の婚姻制度に同等もしくは近い権利・機会を与える、「同性パートナーシップ制度」。制度を地方自治体に導入する意義と課題を、人権・経済・政治等の観点から、専門家や弁護士を招いて、会場のみならずと共にご考えます。</p> <p>今年に入り、米国の同性婚合憲裁判や渋谷区の同性パートナーシップ条例制定などがありました。これらは、グローバルな視点で考え、地域で行動を起こし、個人を変革する持続可能な社会実現のための、理念の重要性と可能性を示しています。</p> <p>本フォーラムは、ジェンダー・セクシュアリティに囚われない持続可能な社会作りを考える機会であると同時に、拠点大学としての北海道大学のミッションと「札幌サステナビリティ宣言」をかんがみ、国際的視野で地域協働の未来構築を考える、市民参加型の行事です。</p> <p>登壇者</p> <p>パネリスト</p> <p>須田 布美子(札幌弁護士会所属弁護士) 須田布美子法律事務所 (http://suda-law.com) 代表。札幌市在住。現在NPO法人ゆいネット北海道理事、札幌市精神保健福祉審議会委員も兼ねる。</p> <p>鈴木 賢(明治大学法学部教授・北海道大学名誉教授) 1989年に発足したLGBT支援のための市民グループ「北海道セクシャルマイノリティ協会(HSA札幌ミーティング)」創始者。</p>

田中かず子(国際基督教大学元教授・同ジェンダー研究センター初代センター長) 現在ジェンダー・セクシュアリティ研究理論を参加型学習につなぐ個人事業「ファーマント」代表。

コメンテータ

石井吉春(北海道大学公共政策大学院教授・同院長) 地域財政、地域経済、地方財政が専門。「地域の自立的発展」「地方分権」「公民連携」を主な関心領域として研究。公民連携の発想や手法を活かした地域づくりに向けて取り組んでいる。

司会・進行役

瀬名波栄潤(北海道大学大学院文学研究科教授・同応用倫理研究教育センター員)

プログラム

1300: 開場

1330: 開会の辞: 新田 孝彦(本学理事)

1340: フォーラム開催趣旨説明

1350: パネリスト3名の自己紹介と主旨への姿勢表明

1435: 休憩(10分)・質問意見回収

1445: 項目別討論(パネリストにコメンテータを加え、登壇者・会場の順)

予定項目

1. 基本的人権尊重の見地から
2. 文化・医療・福祉等の見地から
3. 地方経済の活性化の見地から
4. 地方自治・条例制定化の見地から
5. その他(大学の役割、持続可能な社会作り、など)

1615: 提言

1625: 閉会の辞: 白木沢 旭兎(文学研究科長)

実施報告

本フォーラムでは、同性婚とともに注目されている「同性パートナーシップ制度」を、地方都市に導入することについての意義と課題を様々な観点から考えました。当事者、支援者、弁護士、研究者などが登壇し、人権問題、国内外の動向、地方創生などの観点から、地方自治体における同条例制定について検討し、大学の役割と持続可能な社会作りを来場者と共に議論しました。

「同性パートナーシップ制度」は、現在国内でもっとも注目を集めている新しい制度の一つです。これは、一定の要件のもとで同性カップルを地方自治体が公式に承認する制度のことで、本年3月には渋谷区で条例が制定され、11月5日に「パートナーシップ証明書」が発行されました。7月には世田谷区パートナーシップ宣誓書提出・受領書発行の報道もありました。この制度に法的拘束力はありません。が、しかし性的少数者たちの基本的人権を擁護・保障するためには必要と唱える声だけでなく、社会全体の活性化のための方策の一つとして利用すべきとの考えもあり、導入への反応も様々です。

本フォーラムでは、3名のパネリストと1名のコメントータに登壇いただきました。札幌弁護士会所属弁護士で須田布美子法律事務所代表の須田布美子さん。1989年に発足したLGBT支援のための市民グループ「北海道セクシャルマイノリティ協会(HSA札幌ミーティング)」創始者であり現在は明治大学法学部教授で北海道大学名誉教授でもある鈴木賢さん。国際基督教大学元教授・同ジェンダー研究センター初代センター長で現在ジェンダー・セクシュアリティ研究理論を参加型学習につなぐ個人事業「ファーム」代表の田中かず子さん。そしてコメントータには、本学公共政策大学院教授・同院長で地域財政、地域経済、地方財政が専門で、「地域の自立的発展」「地方分権」「公民連携」を主な関心領域として研究している石井吉春さんをお招きしました。司会進行は応用倫理研究教育センター員の瀬名波栄潤が務めました。

同性パートナーシップ制度導入を巡って、直近の課題、中長期的目標と戦略など様々な意見を交換し、会場からの質疑も活発でした。フォーラム開催前には朝日新聞・毎日新聞・北海道新聞から取材を受け、4度紙面で開催告知記事が載りました。開催翌日には北海道新聞で写真付きの開催報告記事が掲載されました。本フォーラムの内容については、記録集を作成する予定です。



登壇者の集合写真



パネルディスカッションの様子



第3回国際協力カフェおよびイベント

行事内容

開催日時	2015年11月28日(土)13:30～16:30(13:00受付開始) (終了しました)
主催者	北海道大学附属図書館(国連寄託図書館)
共催	国際本部
後援	独立行政法人国際協力機構北海道国際センター(JICA北海道)(予定)、北海道、公益財団法人札幌国際プラザ、日本国際連合協会北海道本部
会場	附属図書館 本館 オープンエリア 他
言語:日本語	対象:一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>北大図書館は国連寄託図書館として講演会「国際協力カフェ」を開催してきました。第3回の講師は国連に関心を持つ有志による任意団体「国連フォーラム」に参加する大学生(北大生含む)です。</p> <p>第1部は国連フォーラムが毎年主催している国連機関の活動の現場に訪問するスタディ・プログラムについての参加した学生からの報告です。</p> <p>第2部は今年9月に掲げられた国連の持続可能な開発目標(SDGs)を切り口としたディスカッションです。</p> <p>なお、イベントとして11/10から11/28にかけてSDGsに関する図書展示・パネル展示(会場:附属図書館 本館 オープンエリア)と、国連フォーラムの活動の写真展示(会場:附属図書館 本館 渡り廊下)を実施します。国連フォーラムの大学生の体験談やディスカッションから国際協力について考える機会にしませんか(事前申込者には温かいお茶をご用意いたします)。</p>
北海道大学側の実施責任者	附属図書館 利用支援課長 豊田 裕昭
事前申し込み	必要(附属図書館のWebサイト内、申込フォームで受付)
参加費	無料
問い合わせ先	<p>北海道大学附属図書館(国連寄託図書館)</p> <p>長嶋 岳生</p> <p>TEL: 011-706-3615</p> <p>E-mail: cref[at]lib.hokudai.ac.jp (※[at]は@に直して送付ください)</p>
URL	http://www.lib.hokudai.ac.jp/2015/11/05/35297/

11月28日(土)午後1時30分から、本館オープンエリア(ラーニングcommons)において『第3回国際協カカフェ「国連フォーラム スリランカ・スタディ・プログラム報告会:SDGsから考える、セカイの未来 わたしの未来』を開催しました。(主催:附属図書館/共催:国際本部)

『国際協カカフェ』は、附属図書館が北海道で唯一指定されている国連寄託図書館として、国際協力に関わる講師を招いて不定期に開催している公開講演会です。第3回の講演者は、国連に関心を持つ有志による任意団体「国連フォーラム」に参加する方々(北大生含む)でした。

講演会は2部構成で実施しました。まず第1部は、国連フォーラムが毎年主催している国連機関の活動の現場に訪問する取り組みである、スタディ・プログラムの「2015 スリランカ・スタディ・プログラム」について、参加した学生からの報告です。続いて第2部は、報告者をファシリテータとした参加者によるグループディスカッションです。ディスカッションのテーマのひとつは、国連が今年9月に採択した持続可能な開発目標(SDGs)です。

当日の参加者は、学生・教職員・高校生を含む市民を合わせて46名でした。参加者に実施したアンケートからは「自分で考えることの重要性を感じた」といった声が寄せられ、特にディスカッションの満足度の高さが窺われました。イベントの最後には、参加者が打ち解けた雰囲気の中で集合写真を撮影しました。

今回のイベントは、参加者が主体的に参加するディスカッションの場を設けることで、国連や関連機関の取り組みについて参加者により深く考えていただける機会になったと言え、国連寄託図書館の活動として一定の成果をあげました。なお、プレイベントとして11月10日(火)から11月28日(土)にかけてSDGsに関する図書展示・パネル展示と、スリランカ・スタディ・プログラムの写真展示を実施しました。



ディスカッションの様子



ディスカッションの様子 2



参加者の集合写真

周縁から越える「境界」—日韓演劇人の越境のかたち



行事内容

開催日時	2015年11月28日(土) (終了しました)
主催者	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター
会場	北海道大学 情報教育館3階 スタジオ型多目的中講義室
言語	日本語・韓国語(逐次通訳あり)
対象	専門家・一般市民・大学生・院生・高校生

行事概要

日本と韓国の演劇交流に取り組む人々を招き、地域が発信する文化交流の意味について考えます。

中心からすれば周縁は相対峙する政治的空間の標識に過ぎません。しかし、地方からはそこに政治関係を通り越してヒトとモノと文化が交流する境界圏がみえてきます。

植民者二世として日韓の「境界」を生きた森崎和江の思想に導かれながら、札幌の舞台がつくりあげる境界圏をとおして今後の日韓関係のあり方を模索します。

北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2015
日韓国交正常化 50 年記念シンポジウム

周縁から越える「境界」

—日韓演劇人の越境のかたち—

日時 2015年11月28日(土)
13:00~17:30 / 12:30開場

場所 北海道大学情報教育館3階
スタジオ型多目的中講義室
札幌市北区北17条西3丁目
※南北線北18条駅より徒歩10分

中心からすれば、周縁は相対峙する政治的空間の標識に過ぎないでしょう。しかし、地方からはそこに政治関係を通り越してヒトとモノと文化が交流する境界圏がみえてきます。

本シンポジウムは、北海道と大阪で日韓の演劇交流に取り組む人々を招き、植民者二世として日韓の「境界」を生きた森崎和江の思想に導かれながら、札幌の舞台がつくりあげる境界圏をとおして今後の日韓関係のあり方を模索します。

<p>〈第1部〉 13:00~14:30</p> <p>対談 森崎和江の思想から考える 日韓の未来</p> <p>松井理恵 (北星学園大学非常勤講師) X 玄武岩 (北海道大学大学院准教授)</p>	<p>〈第2部〉 14:40~17:30</p> <p>シンポジウム 日韓演劇人の越境のかたち</p> <p>〈パネリスト〉 木村典子 (札幌産 プロデューサー) キム・グァンボ (韓国 ソウル市劇団員) 宮田圭子 (札幌産 女優) 池田嘉隆 (DRAMA MISSION 2号 主宰) 〈進行〉 渡邊浩平 (北海道大学大学院教授)</p>
---	--

言語：日本語・韓国語(逐次通訳あり)
事前申し込み：不要
参加費：無料

主催：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター
協-会場：東アジアメディア研究センター 3階 講義室
TEL / 011-705-5143 E-MAIL / eastasia2@rc.hokudai.ac.jp

北海道大学側の実施責任者	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授 玄 武岩
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院 メディア・コミュニケーション研究院附属 東アジアメディア研究センター 芳賀 TEL: 011-706-5143 E-mail: eastasian2[at]jmc.hokudai.ac.jp (※[at]は@に変えて送信ください)

実施報告

札幌と大阪という地方都市で韓国と日本の演劇交流に取り組む市民を招いて、シンポジウム「周縁から越える『境界』-日韓演劇人の越境のかたち-」を開催しました。日本と韓国の関係が政治的に膠着するなか、地道に文化交流を続けてきた人たちの事例を通じて、今後の日韓関係の未来を探ろうと企画したものです。

第一部は、本学教員と外部研究者による対談を行いました。日本植民地時代の朝鮮に生まれたことを〈原罪〉と意識しながら、終戦後に炭鉱労働や女性問題について多くの著作を発表した森崎和江を取り上げ、彼女の思想から日韓関係の展望を考えました。

第二部は札幌・大阪・ソウルの演劇人によるシンポジウムを行いました。韓国の劇団との共同作業を続けている北海道演劇財団「札幌座」と大阪の「Drama Mission Z號」の活動を映像を交えて紹介し、日韓交流を始めた契機について聞いたうえで、市民による文化交流が両国関係にどのような影響をもたらすのかについて討論しました。参加者は本学教員、学生、一般市民合わせて約40人でした。

日韓両国は政治、経済、文化などあらゆる面で歴史的に密接な関係にあった隣国であり、それは今後も変わることはありません。各分野でさまざまな研究が行われていますが、当学院では特に文化的側面から両国の関係を考察する企画を今後も続けていく計画です。



第一部 対談の様子



第二部 パネルディスカッションの様子



低温科学国際シンポジウム

行事内容

開催日時	2015年11月30日(月)～2015年12月2日(水) (終了しました)
主催者	低温科学研究所
会場	低温科学研究所 3階 講堂
言語: 英語(通訳無し)	対象: 専門家・大学生・院生
行事概要	<p>北海道大学低温科学研究所(ILTS)は、ILTS低温科学国際シンポジウムを開催いたします。</p> <p>このシンポジウムは、低温科学研究所の研究テーマである、寒冷圏および低温環境下における諸現象に関する基礎的・応用的研究について、その最新の成果と将来的展望について議論することを目的としています。</p> <p>シンポジウムでは、(1)水および物質の循環、(2)雪氷の新領域科学、(3)環境生物学、および(4)環オホーツク領域の研究について、4つのセッションを開催いたします。使用言語は英語です。北海道大学内および国内外の研究者・学生の皆様の参加を御待ち申し上げます。</p> <p style="text-align: center;">* 時刻詳細はこちら *</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11月30日(月) 13:00～18:00 ・12月1日(火) 9:00～18:00 ・12月2日(水) 9:00～12:00

* プログラム *

(※画像をクリックすると詳細をご覧になれます。)

**ILTS International Symposium on
Low Temperature Science**

Program and Abstracts



30 November – 2 December 2015

Auditorium

**Institute of Low Temperature Science (ILTS)
Hokkaido University**

北海道大学側の実施責任者 低温科学研究所 教授 Ralf Greve

事前申し込み 有り(ウェブサイトから登録用紙を入手しメールにて9/18までに送付)

参加費 無料

問い合わせ先 低温科学研究所

佐崎 元

TEL: 011-706-6880

E-mail: sazaki[at]lowtem.hokudai.ac.jp (※[at]は@に変えて送信願います)

※お申し込みをご希望の方は、登録用紙

(<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/symposium.html> より入手ください)にご記

入の上、symposium@lowtem.hokudai.ac.jpまでe-mailでお送りください。

URL

<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/symposium.html>

実施報告

北海道大学低温科学研究所(ILTS)は、北海道大学サステナビリティ・ウィーク2015の一環として、「ILTS低温科学国際シンポジウム」を平成27年11月30日(月)から12月2日(水)の3日間にわたり低温科学研究所3階講堂で開催しました。

このシンポジウムは、当研究所の研究テーマである、寒冷圏および低温環境下における諸現象に関する基礎的・応用的研究に関して、その最新の成果と将来展望について議論することを目的として企画されました。

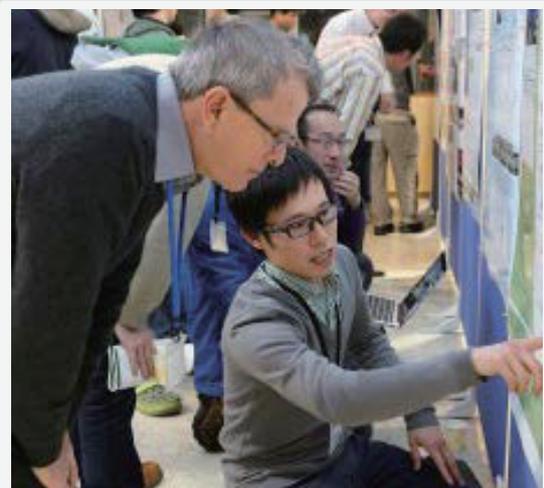
シンポジウムでは、(1)水および物質の循環、(2)雪氷の新領域科学、(3)環境生物学、および(4)環オホーツク領域の研究について、英語による4つのセッションを実施しました。

今回の総実参加者数は97名(うち、外国人研究者・外国人大学院生等14名)で、ドイツ、米国、スイスからの参加もありました。また、ブレーメン大学、スイス連邦工科大学、アルフレッドウェゲナー極地海洋研究所等の海外大学・研究機関から招聘した7名の研究者から最新の海外研究状況等についても紹介が行われました。

昨今、環境問題においては寒冷圏の地球環境変動での位置づけの重要度が増してきています。そのため、サステナビリティという観点から本シンポジウムは非常に有意義な会となりました。



開会式の様子



ポスターセッションの様子



参加者の集合写真



行事内容

開催日時	2015年12月3日(木) (シンポジウム13:30~18:05/レセプション19:00~21:00) (終了しました)
主催者	サステイナブルキャンパス推進本部・施設部
会場	学術交流会館(講堂)
言語	日本語・英語(同時通訳あり)
対象	専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>サステイナブルキャンパス国際シンポジウムは、今年で5回目を迎えます。</p> <p>大学キャンパスは、「社会的学習の場」という新しい役割を持ち始めています。実社会の課題を解決しようとする、サステナビリティ学の教育プログラムに取り組む大学は、専門分野の異なる教員の知識、学生のアイデア、社会のニーズを統合させ、大学を“象牙の塔”から社会に開かれた場へと、どんどん進化させています。</p> <p>この進化を起こす鍵となるものは何でしょうか？大学全体を巻き込み、動かしていく秘訣があるのでしょうか？</p> <p>今年のシンポジウムでは、①北海道大学全体を巻き込む「チーム・ビルディング」の方法、②サステナビリティ・オフィスの役割、③トップコミットメントとボトムアップの双方向の戦略について議論します。マサチューセッツ工科大学(アメリカ)、ブリティッシュコロンビア大学(カナダ)、国内からは名古屋大学の、計3つの大学からゲストスピーカーをお招きします。</p>

ポスター

(※画像をクリックすると、詳細をご覧になれます。)



北海道大学側の実施責任者 サステイナブルキャンパス推進本部 プロジェクトマネージャー 横山 隆

事前申し込み 必要(※2015年11月26日をもって申込受付を終了しました)

参加費 無料

問い合わせ先 ※お申し込みを希望される方は、下記電話もしくはメールにてご連絡ください。

サステイナブルキャンパス推進本部

TEL: 011-706-3660

E-mail: osc[at]osc.hokudai.ac.jp (※[at]を@に変えて送信ください)

実施報告

昨年の本シンポジウムは「サステイナブルキャンパス構築のための思想と実践 —大学にとって「地域」とは—」をテーマとしており、大学と持続可能な社会との関係を根源的に問い直し、大学の社会における役割を理念的に再確認することができました。

今年のシンポジウムのテーマは、「持続可能な社会実現のためのチーム・ビルディング」であり、「昨年の成果を引き継いで、大学が社会的役割を果たすためにどのような戦略と組織づくりを推進すべきか、具体的に議論することを目的として実施しました。基調講演では、「社会的学習の場」という大学キャンパスの新しい役割、また大学の教職員が周辺の地域社会と関わることの価値 の2つの視点から、3名の講演者を招聘しました。

米国、マサチューセッツ工科大学(MIT)のジュリー・ニューマン博士からは、世界をリードする研究成果を求められる一流大学として、また、エネルギー負荷の大きい工学系研究重点大学として、MITがサステイナビリティ戦略をどう捉えているのか、また、新しく始まった所在地域であるケンブリッジ市との連携プロジェクト「エコ・ディストリクト」がどのように推進されているのか、という点についての講演を頂きました。

カナダのブリティッシュコロンビア大学(UBC)は地元バンクーバー市との都市計画における協働事業の実績が多く、また、同市および大学キャンパスの環境負荷低減でも連携しています。ジェームス・タンシー教授からはこの点について講演を頂きました。

また、名古屋大学は、大学執行部、教員、職員、建築環境に関わる研究室を巻き込んだキャンパスマネジメントの組織体制が確立していることで知られており、田中 英紀 特任教授からはその組織づくりと成果について講演を頂きました。

基調講演の後、パネルディスカッション「世界の課題解決と持続可能な社会構築に向けた大学の体制—札幌サステイナビリティ宣言(G8大学サミット,2008年)以後の北海道大学の取組」を行いました。北海道大学経済学研究科長 吉見 宏 教授の司会のもと、本学の三上理事、川端理事もパネリストとして参加し、教育・研究という大学の“本分”にサステイナビリティ学をどう取り込みうるか議論を行いました。



ジュリー・ニューマン博士の講演の様子



ジェームス・タンシー教授講演時 会場の様子



パネルディスカッションの様子



HULT PRIZE@北海道大学 学内コンペティション

行事内容

開催日時	2015年12月12日(土)9:00~13:30 (終了しました)
主催者	Hult Prize Hokkaido Universities' Team
共催	人材育成本部 国際人材育成プログラム (I-HoP)
会場	フード&メディカルイノベーション国際拠点
言語: 英語(逐次通訳)	対象: 一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	<p>Hult Prizeとは、“HULT PRIZE”という、ビル・クリントン財団(CGI)が後援し、国際的に急速に評価を高めているビジネス・スクールである Hult International Business School が実施している、国際的なコンペティションです。</p> <p>優勝賞金100万ドルの、社会起業アイデアに関する国際コンペがあり、今年度(最終審査は2016年9月)日本からは、北海道大学と他、もう1校だけが参加資格を得ています。</p> <div style="text-align: center;">  <p>HULT PRIZE @ Hokkaido University (Japan)</p> </div> <p>大学内で10チーム以上によるコンペを行い、学外の有識者を含めた3人以上の審査員による審査を勝ち抜いたチームは、全世界5箇所で開催される地区大会への参加資格が与えられます。地区大会の優勝チーム(各1チーム)は、2016年9月にニューヨークで開催される決勝大会に進み、そこで優勝したチームには起業資金として百万ドルが提供されるほか、起業と事業化を加速するための様々な支援が与えられて、「社会を大きく変える」事が期待されています。</p>

スーパーグローバル大学として、国際化を促進している本学には、海外からも優秀な留学生や、外国人研究者が集まっており、今回はアフリカから来日している博士後期課程留学生が中心となって参加資格を獲得したため、大学内の関係部門が連携・協力して、全面的な支援を行っています。学内コンペは11月末に札幌キャンパス内で実施予定で、応募資格は本学の学部生、修士、博士課程学生に限られますが、3～4人で構成される各チームがインパクトの大きな社会企業の企画を競い合うこのコンペ会場は、企業や出資者などにも広く公開されます

ウェブサイト

HULT PRIZE@HU 公式ウェブサイト:

<http://hultprizeat.com/hokkaido>

Facebook :

<https://www.facebook.com/Lets-Engage-in-HULT-1713724258859501/>

Hult Prize Official HP :

<http://www.hultprize.org/>

北海道大学側の実施責任者	大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程(D2) Dicko Seydou
事前申し込み	必要(詳細ウェブサイトにて。応募希望学生は、ウェブサイトまたはメールにて連絡。観覧希望者は、メールにて連絡要)
参加費	無料
問い合わせ先	大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程(D2) Dicko Seydou TEL: 080-4044-7198 E-mail: said_manga[at]yahoo.fr (※[at]を@に変えて送信ください)
URL	http://hultprizeat.com/hokkaido

実施報告

12月12日(土)、フード&メディカルイノベーション推進本部 多目的ホールにて、道内初のハルト・プライズ大会を開催しました。総勢17チーム、計61名の学生が参加し、世界を変える社会起業のアイデアを競いました。開催目的は、北海道大学の国際的な広報と共に、学生の為に研究やアイデア、技術を実用的に使う国内外の社会に貢献できるプラットフォームを作ることでした。大学院国際広報メディア・観光学院 修士課程のSeydou Dickoさん、大学院保健科学院 修士課程のKritika Poudelさん、大学院教育学院 博士課程の岩佐 奈々子さんの3名が中心となり、北海道大学の参加資格を得て今回の開催に至りました。学年や所属部局、国籍など多様な顔ぶれの17チームが参加し、今年度のテーマである世界の密集都市の課題解決の為、水、電力、農法、食料、ナノテクノロジーやゴミ問題など、様々な視点から提案しました。審査は、株式会社アミノアップ科学 代表取締役会長の小砂 憲一氏、在札幌米国総領事館 広報・文化交流担当領事のハービー・ビーズリー氏、一般社団法人re:terra代表理事 渡邊 さやか氏、株式会社グロービス

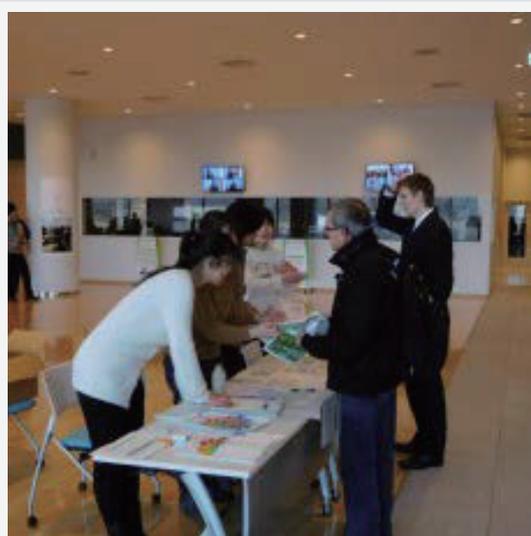
研究員 小早川 鈴加氏、大学院生命科学院の西村 紳一郎教授の5名が行いました。のべ120名の観客が来場して大会を盛り上げました。優勝は、垂直農法キットを提案したチーム“Awrka”に決定。また食用ウキクサを提案した“がんばろう環境”が第二位に続きました。優勝チームは米国で行われる地区大会に出場します。今回の開催にあたり、新渡戸スクール特任准教授の難波 美帆先生および人材育成本部 特任教授の飯田 良親先生に多大なるご協力を頂きました。来年度以降もハルト・プライズ大会を開催し、持続可能な社会実現の為に、国際的な学生の為のプラットフォームを形成していきたいと考えています。



優勝チーム Awrkaの表彰の様子



第2位チームGanbarou Kankyoの発表の様子



ボランティア学生による受付の様子



参加者と審査員の集合写真



行事内容

開催日時	2016年3月5日(土)～2016年3月6日(日) 8:30～17:30 (終了しました)
主催者	在日インドネシア留学生協会—北海道地域
共催	北海道大学文学研究科 人間システム科学専攻地域システム科学講座
後援	北ガス、インドネシア共和国名誉領事館
会場	人文・社会科学総合教育研究棟(W棟)
言語	英語(逐次通訳あり)
対象	専門家・大学生・院生
行事概要	<div style="text-align: center;">  </div> <p>近年、持続可能な社会の構築や食糧問題は、大きな注目を集めています。技術発展と急速な産業発展と共に、生態系への悪影響を最低限に留めるための管理システムの構築が必要とされています。インドネシアはもともと、農業、林学、漁業などの自然資源や再生可能／不可能エネルギー、また人材資源などいくつかの分野で経済的な利点があります。これらの利点が、持続可能な経済発展と持続可能な人間の生活環境を実現する術になるということを、確実にできる優れた管理と評価が必要とされています。つまり、日本在住のインドネシア人研究者による科学・技術発想に貢献することは、持続可能な世界を達成するために必要不可欠だと考えます。</p> <p>研究会初日は、在日本インドネシア大使館の教育アタッシェによる基調講演と、各範囲をカバーしたプレゼンテーションを行います。</p> <p>範囲1：社会、環境と人間性</p> <p>範囲2：食べ物と自然科学</p> <p>範囲3：工学と未来のテクノロジー</p>

最も優れた発表を選ぶため、委員会はそれぞれのグループの中で最優秀賞を決めます。選考は、発表内容のオリジナリティと目新しさ、その分野での潜在的インパクト、内容の明確さ、口頭プレゼンテーションの質を考慮して評価されます。

研究会2日目は、「札幌学習ツアー」と題して、防災センターと札幌市下水道科学館を訪れます。

過去12年間に渡って開催してきたインドネシア留学生協会研究会は、今年で13回目になります。インドネシアの持続可能性についての諸問題を解決するべく、多くのインドネシア人学生や若い研究者が参加してきました。今回は、インドネシア人学生のみならず、多様で国際的な参加者をお待ちしております。

北海道大学側の実施責任者 北海道大学大学院環境科学院 博士課程2年 Laode Muh Yasir Haya

問い合わせ先 北海道大学大学院環境科学院 生物圏科学専攻 修士2年

Desi Utami

TEL: 090-2819-4360

E-mail: desiutami_ugm[at]yahoo.com (※[at]を@に変えて送信ください)

URL <http://hisas13.ppi-hokkaido.org/>

作成日：平成 29 年 3 月

作成者：北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局

〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目

TEL 011-706-8031 / E メール contact@oia.hokudai.ac.jp

北海道大学国際部国際企画課

〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目

E メール planning@oia.hokudai.ac.jp
